

北海道価値創造パートナーシップ会議 i n 帯広
～新たな北海道総合開発計画に向けて～

日時：平成27年10月2日（金）14：00～16：30

場所：帯広経済センタービル（帯広商工会議所）

6階 大会議室

次 第

- 1．開 会
- 2．出席者紹介
- 3．出席者からの活動や取組の概要紹介
- 4．国土交通省北海道局説明
 - ・新たな北海道総合開発計画の中間整理の概要について
- 5．意見交換
- 6．閉 会

1. 開 会

○**小林開発計画課長** それでは、定刻になりましたので、北海道価値創造パートナーシップ会議 in 帯広～新たな北海道総合開発計画に向けて～を開催させていただきたいと思いをします。

本日は、爆弾低気圧というような感じで報道されていますけれども、非常に全道的に天候が悪いので、帯広の方は晴れてはいるのですけれども、非常に風が強い中、天候が悪い中、皆様、お忙しいところお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。私、この会議の司会を担当いたします北海道開発局の小林と申します。どうぞよろしくお願いいたします。以降、座って進めさせていただきたいと思いをします。

この会議は、新たな北海道総合開発計画の中間整理について、北海道内各地域の課題解決や活性化に日頃から活躍しておられる方々から御意見等をお伺いいたしまして、今後の新計画の立案に活かすとともに、関係者相互の協力関係構築の促進を図ることを目的として開催させていただくものでございます。

本日の会議は、マスコミの方も含め、一般の方々に傍聴いただいております。

また、本日の配付資料でございますが、お手元の方にあると思いをします。資料1から8までとなっております。ご覧いただきまして過不足等ございましたら、事務局の方にお申しつけくださいますようお願いいたします。

なお、本日の議事録及び資料につきましては、後日、国土交通省のホームページに掲載することを予定しております。あらかじめ御承知おきください。

それでは、初めに国土交通省を代表いたしまして、岡部北海道局長から一言御挨拶申し上げます。

○**岡部北海道局長** 皆様、どうもこんにちは。国土交通省の岡部でございます。

今、司会からも話がありましたように、非常に風の強い中、聞くところによりますと、交通機関も結構乱れたりもしているようですけれども、そういう中、御出席をいただきましてありがとうございます。

また、傍聴の皆様も大勢おいでいただきましてありがとうございます。

今、話にありましたように、北海道価値創造パートナーシップ会議 in 帯広ということでございます。副題にありますように、新たな北海道総合開発計画に向けてということでございます。北海道開発法という法律がございまして、それに基づいて、国として北海道の今後の整備方針をどうするかという計画をおおむね10年置きぐらいに立てておりますけれども、今ちょうどそのタイミングで、新しい第8期計画というものの立案に向けて作業をやっているところでございます。

この1月からその作業に関わっております。具体的に言いますと、国土審議会の北海道開発分科会というところに計画部会というのを設置いただきまして、そこで具体的な検討をいただいているところでございまして、今日おいでいただいております中嶋先生、それから神田先生も、その計画部会に所属いただき、今、精力的に計画の素案づくりをやっ

ていただいているところでございます。

今日は帯広でございますけれども、全道各地で各地域それぞれで活躍されている皆様からの意見も聞こうということで、全道、一巡りやっております、今日の帯広が9カ所目、全道のシリーズの中で帯広が最後になるのですけれども、こういった形で各地域それぞれのお立場で、地域の中で積極的に活動されている皆様から色々御意見をいただいたり、あるいは経験談をいただいた中から、計画の中に是非参考として活かさせていただきたいということで、このような機会を設けさせていただいているわけでございます。

今後の予定といたしましては、皆様方からいただいた意見も踏まえながら、更に中間整理をベースにいたしまして、目標としては、来年の3月に閣議決定をして、正式に計画を定めようということにしております。

中間整理の方向性については、後ほど我々の方から説明させていただきますけれども、北海道は、人口減少、高齢化が非常に進んでおりますが、一方で、北海道が生産する農産物あるいは水産物の品質が非常に最近高く評価されて、物によっては海外に出ていったりもしている。更に、インバウンド観光というのが随分話題になっておりますけれども、特に東南アジアの方々から北海道は非常に人気がありまして、いらっしゃるお客様が急速に増えているという状況もあります。

そのような中で、北海道の強みであります生産する空間をきちっと活かしながら、食と観光を何とか世界水準にしていこうというのが、今、中間整理の骨子になっております。後ほど詳しく説明させていただきたいと思いますが、そのようなものをベースにしながら、皆様の御意見もいただきながら、まとめてまいりたいというふうに思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それから、計画を作るところまでではなくて、作った後、いかに推進していくかということが非常に重要だと思っております。せっかく作った計画を絵に描いた餅にしないという意味で、その後の推進についても考えて参りたいというふうに思っておりますけれども、その際に、今日お集まりいただいた皆様にも、計画を作るプロセスで色々御意見をいただくだけではなくて、計画の推進プロセスに入った後も、また様々な形で御助言をいただいたり、あるいは御協力をいただいたり、あるいは一緒にやったりというようなことができればというふうに思っております。そういう意味も込めて、パートナーシップ会議という名前をつけさせていただきます。

本日は、限られた時間でございますけれども、忌憚のない御意見をいただければというふうに思っておりますので、よろしくお願いいたします。

今日は、どうもありがとうございました。

○小林開発計画課長 報道の関係者の方々を始め、傍聴の皆様のカメラ撮影は、ここまでということにさせていただきたいと思います。

2. 出席者紹介

○小林開発計画課長 続きまして、本日御出席の皆様を御紹介申し上げます。

私の方からお名前を言いますので、よろしくお願いします。

まず、近江正隆様でございます。

片山静香様でございます。

榊孝弘様でございます。

正保里恵子様でございます。

中川裕之様でございます。

山本眞樹夫様でございますが、小樽の方にお住まいということで、J R北海道運休の関係で、今回はやむを得ず御欠席ということになってございます。山本様から事前に資料の御提供をいただいております、資料8というのが山本先生の資料になります。お時間があれば、後ほどご覧いただければと思います。

それでは、次に、国土審議会北海道開発分科会計画部会の出席者を紹介いたします。

中嶋委員でございます。

神田委員でございます。

国土交通省の出席者を紹介いたします。

岡部国土交通省北海道局長でございます。

横田国土交通省北海道局企画調整官でございます。

難波江北海道開発局開発監理部次長でございます。

河畑北海道開発局帯広開発建設部長でございます。

それでは、ここから先の司会につきましては、中嶋委員にお願いさせていただきたいと存じます。よろしくお願いいたします。

○中嶋氏 東京大学の中嶋でございます。僭越ながら司会を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

3. 出席者からの活動や取組の概要紹介

○中嶋氏 それでは、早速でございますが、最初に、御出席の皆様から各地域での日頃の活動や取組の概要などについて、お一人3分程度で御紹介をいただければと考えております。順番といたしましては、近江様、片山様というふうな順番でお願いできればと思っております。

それでは、まず近江様、よろしくお願いいたします。

○近江氏 改めまして、よろしくお願いいたします。近江です。座って説明させていただきます。

私の方は、資料3ということで4部、今携わらせていただいている活動についてのパンフレットを御用意させていただきました。3分ということなので、ちょっと駆け足になりますけれども、御容赦願います。

まず一番最初、「農村ホームステイのすすめ」ということで、実は今日、大阪府立吹田

東高校という高校の修学旅行で、十勝広域農林漁業者宅で、今ちょうど進行中です。修学旅行で十勝に、この秋2,000人の大阪の高校生がやってくるようになっております。

具体的には、その中の1泊を農林漁業者のお宅にホームステイし、ありのままの生活体験をするというプログラムです。食の絆を育む会という母体が運営窓口をしております。現在十勝管内に12団体の構成メンバーがございます。大体がそれぞれの市町村の役場の方が事務局を担われているという体制です。今日の吹田東高校は、全部で320人、八つのエリアで、南は広尾、大変風が強いということで大変な状況ですけれども、東が足寄、西が新得という形で、本当に十勝広域で受け入れているものです。

こちらの取組なのですけれども、御興味を持たれたら是非読んでいただきたいと思います。ありのままの生活を、なかなか北海道がイメージできない都会の高校生に生活体験を通じて提供しているということです。

実は、私も今は十勝の浦幌町というところに住まわせていただいているのですけれども、出身は東京都生まれでして、19歳の時に北海道に憧れて十勝にやってまいりました。今でこそ、先ほど局長のお話の中にもありました北海道の価値という部分で間違いなく挙げられる農業ですとか、圧倒的な生産力、まさしく命の糧を育む地域というものは、決して北海道だけではなくて、日本全国、特に私の出身地の東京の人たちにとっても大事な地域だという認識を持つべきはずなのに、私もそうだったのですけれども、なかなか都会にいとつながりもないですし、イメージがわからない。

大事だということが社会の時間だったり、色々と学校教育の中で学ぶのですけれども、なかなかイメージがわからないという部分で、その問題解決、課題解決の一つとして、何か難しいことを伝えるのではなくて、ありのままの生活体験の中で、まずは十勝を、農林漁業者の方たちを身近に感じてもらおうということで、十勝管内、現在500戸の農林漁業者の方たちと取り組む形になっております。こちら、ちょうど今月2,000人の高校生を受け入れる現在進行形の取組です。御興味を持っていただけたらと思います。

また、次になります「とかち農村ホームステイ」ということで、こちらは、この活動に農家の方たち、また最近ではJAの方達もかなり積極的に関わっていただけるようになりましたので、内部向けに作らせていただいたものです。

めくっていただきまして、1枚目に「次の百年のために種を蒔く」というようなメッセージがありますが、これは、当NPO法人の理事でもある昨年度全国の農協青年部の会長を務められた芽室町の黒田さんからのコメントということで、書かせていただいております。こちらにも御興味を持たれたら、是非読んでいただきたいと思います。

その次のパンフレットです。

こちらは小さ目のパンフレットですけれども、「農村ホームステイのすすめ」ということで、農業・農村ふれあいネットワーク、こちらは、道庁、道教委、JA中央会さんとともに作る組織というふうに把握しております。

こちらの取組は北海道全体、先ほどの食の絆を育む会は、十勝の取組ですけれども、こ

ちらのパンフレットは、全道の若手農業者の方たち、北海道農協青年部として、実は地域の先生たちに地域でホームステイ、生活体験をさせるというようなプログラムを提供しております。学校の先生たちにもっともっと身近に農村を感じてもらおうというようなことを考えた時に、農村に住む若手、大体同世代の生産者のお家に泊まるというようなことを全道レベルで行っております。こちらの取組は、私の方でコーディネーターを務めさせていただいております。こんなことも関わらせていただいているということでございます。

ちなみに今年は、道教委の方から依頼を受けまして、新卒の栄養教諭の初任者研修もこのホームステイを採用させていただいております。

最後になります。文部科学省委託事業ということで、今様々に、農家さんだったり、学校だったりをつなぐコーディネートの役割をさせていただいているのですが、昨年度、文科省からオーダーを受けまして、学校と地域をつなぐ、学校と地域が協働していくためにはどんなことができるだろう、そういう研修プログラムを開発させていただきました。このパンフレットも弊社の方で作らせていただいたものです。

地方創生が叫ばれる中、地域の子供たちがもっともっと地域に目を向けるという部分で、地域に根差した教員の育成というものが大きな課題になっております。そういう中で、私も北海道教育大学の釧路校の非常勤講師をさせていただいたりですとか、先生達にもっともっと地域に目を向けていただくことで、何か強制的ではなくて必然的に生まれることが、まさしく地方創生の近道なのだろうと思っていますところです。そういう中で、この「地域とともにある学校づくり」というものが、これは国も進めていく中で、昨年度、このパンフレットづくりに関わらせていただいたことは、大変名誉な事かなというふうに思っているところでございます。

最後になりますけれども、このパンフレットの3ページ、4ページをご覧ください。

この後の意見の部分で、是非機会があれば述べさせていただきたいというふうに思っておりますが、3ページのところに書かれております、これはよく例えられますけれども、現在、小学校に入学した子供の65%は、大学卒業後に現在存在しない仕事に就職すると言われているとあります。それだけ激動な時代の中に、私も子供が3人いますけれども、子供たちを送り込まなければならないこういう時代に、何を子供たちにすればいいのか、まさしく本日のこの会議の中で私も勉強させていただきたいなというふうに思っているところです。

以上です。終わります。

○中嶋氏 ありがとうございます。

それでは、片山様よろしくお願いいたします。

○片山氏 改めまして、季刊誌「スロウ」の副編集長をさせていただいておりますソーゴー印刷の片山静香と申します。よろしくお願いいたします。

私どもが作っております「スロウ」という雑誌なのですが、年に4回発行しております、北海道全域を取材対象としているものなのですが、端的に申し上げます

と、ライフスタイルカタログという表現が編集部の中ではされておりまして、色々な北海道内の飲食店だったり、そういったお店紹介もあるのでありますが、お店を通して、その奥にいる人の物語を拾い上げるというところを心がけておりまして、その人の暮らしぶりですとか、生き方というところを、私たちの方から主張するというよりは、聞いたことをお伝えして、読者の方々にこういった暮らし方があるのだというようなところを知っていただいて、こういう暮らし方がいいなというふうに思っただけのようなものを目指して作っております。

資料の方なのですが、端的に表すようなパンフレット等がなかったので、ざっくりと作らせていただいたのですが、まず1ページめくっていただいて、ソーゴー印刷という会社の中にクナウマガジンという出版部門がありまして、その中で雑誌を作っているのですが、季刊誌を作るのがメインなのですが、地域版で市町村版の小さな冊子を作ったりですとか、カフェですとか、パンですとか、テーマを絞った本を作ったりですとか、イベントの企画運営なども最近は行っております。

「スロウ」の編集理念として、足元の豊かさに光を当てながら「わくわく北海道」を作りますというふうに、3ページ目に書かせていただいているのですが、これは、先ほど申し上げましたライフスタイルカタログというところにつながっていく、一般の方々の暮らしを拾い上げるというような意味が込められております。

続いて4ページ目に、私たちで発行させていただいている雑誌をずらっと並べさせていただいております。今年の5月から「スロウな旅北海道」という新しい編集部がクナウマガジンの中に立ち上がりまして、旅行雑誌といいますか、そういった情報誌の発行も今年から始めております。

出版社といいまして、なかなか仕事の内容というか、何をしているかというのが分かりにくいところがありまして、ちょっと簡単に申し上げさせていただきますと、まず取材活動、編集作業を全て編集社の方で行っております。カメラマンと二人で、色々道内各地に行きまして、実際にそこにいらっしゃる方にお会いして、お話を伺って、記事を書くというような作業の一連を全て編集社の方で行います。

続いて、次のページをめくっていただきまして、オリジナルの商品開発もここ数年で始めておりまして、写真を載せさせていただいているのは、みそとコーヒーなのですが、私が自ら作っている写真が出ているのですが、こういった道内の生産者の方と協力しまして、スロウオリジナルということで商品の開発を行って、販売等も行っております。スロウの雑誌の方に通信販売の企画がありまして、本を通じてお取り寄せという形もとらせていただいているので、そういったところで商品のPRといいますか、発信活動も行っております。

次のページで、去年、台湾翻訳版の雑誌も出版いたしました。

これは、台湾の出版社と印税契約という形です。うちの方で版權を売りまして、台湾の出版社の方で編集し直して、台湾向けに発行したというものです。北海道移住の本という

ことなのですけれども、これは北海道に移住された方が沢山アーカイブになっている本で、台湾の方が実際に北海道に移住するわけではないのですけれども、そういった参考にといいますか、憧れの暮らしというような意味合いで、すごく好評をいただきました。

あと、最近は台湾絡みのお仕事が多くなってきておりまして、DVD付きの冊子の編集なども行っております。

続いて、先ほどイベントの主催ということで申し上げたのですけれども、「スロウ村の仲間たち」というイベントを3年前から行っておりまして、雑誌の紙媒体だけではなく、実際に生産者の方と読者の方をつなぎ合わせようというコンセプトで始まったものです。十勝がメインになるのですけれども、他の道外の各地から「スロウ」に掲載させていただいた生産者の方々に集まっていただいて、色々と交流を深めてもらって、新たな商品開発ですとか、そういったつながりを作っていただくというようなものを行っております。

次に「スロウ村の仲間たち」ですが、来週末に池田町の「十勝まきばの家」で開催を予定しております、すみません、宣伝になってしまいますが、そのイベントの中でどういったことをしているかといいますと、「スロウ」に掲載された方々の御紹介ですとか、展示販売というようなこともありますけれども、北海道内で活躍されているバンドを呼んでのライブイベントですとか、印刷会社なので、印刷の特性を生かしたようなワークショップなどを行っております。昨年は8,000人の来場者にお越しいただいて、御好評をいただいたイベントです。次のページに写真を載せさせていただいております。

その次に行かせていただきます。その他イベント実績ということで、先ほど作ってありましたブレンドコーヒーを開発していただいた焙煎屋さんが、茶話会を開く際に一緒に協力して、どういった経緯でコーヒーができたかですとか、その商品開発の経緯を一般の方々に説明するというようなことを行ったりですとか、弊社で発行しているもので「暮らしを彩る器を探して」という本があるのですけれども、北海道内の陶芸家の方々を取り上げた冊子から派生して、掲載された方々が主催して集まってイベントを開催していただいたこともありました。

最後のページに、「キーワードは地域づくり」というふうに書かせていただいているのですけれども、これは編集部内で常々共有している理念ということでして、色々と魅力的なものが沢山ある北海道の、それを発信できるツールを持っているというところがうちの強みというか、皆様に協力させていただける部分かなと思っておりますので、そういった地域づくりという観点で、色々な出版物ですとか、あとウェブですとか、動画配信などを、これからも行っていきたいと思っております。

以上です。ありがとうございました。

○中嶋氏　ありがとうございました。

それでは、榊様よろしくお願いします。

○榊氏　岡本農園の榊でございます。代表をしております、その他にも十勝中札内ファーム街道委員会の委員もやらせていただいております。

私の紹介については、会議資料の出席者プロフィールにも書いておりますが、11年前は公務員をしていました。10年前、岡本農園といううちの嫁の実家に就農したということですが、岡本農園自体は、昭和6年に福島県の南相馬から入植しております。私が4代目になるということで、引き継いでいくという重要性を考えながら、新規就農をさせていただきました。その後に、平成17年に新規就農として入っておりますけれども、平成20年に農業に実際携わりながら、6次産業化という今の取組になるのですけれども、6次産業化の重要性というところを自分なりに考えて取り組んだ経緯があります。

取り組んだ6次産業化に対しての実績については、資料5-2のパンフレットに記載しておりますけれども、農産物を生産して、加工・販売までやった商品でございます。

そういった中から6次産業化を推進しているということですが、6次産業化の中には、三つとても重要なことがあるというふうに私自身考えて、進めております。

まず一つは、地域間の中で安全・安心な食料、食べ物を流通させるということ。

これは、日本という大きい部分に関しても言えるかと思います。そういうことをしたことによって、国産の食べ物が皆さんに流通をして、最後はまた循環してみんな影響を受けたいけると。そういう安全・安心という部分の形を構築できると。

二つ目が、地域活性化に大きく役に立つというふうに考えております。

その一つに、資料5-3の十勝中札内ファーム街道というパンフレットがあります。この裏に、7社と連携して、この連携が6次産業化で例えれば点という位置づけになりますが、この点がファーム街道という線につなげることによって、色々お客のニーズに応えた、そういう動きに変わってきております。そういったことが、最終的にその地域の面に色々な効果として与えていくものだということをやっております。

そういったことで、二つ目としては、地域活性化に大きく役立つと。またその他にも道路だとか、景観だとか、色々そういうような線を結んだり面にいくということは、色々な公共性も出てくるかと思えます。そういう事にも役立っていくのかなと思っておりますし、そういうものを進めていかなければならないというふうに思っています。

あと三つ目は、農業経営をもちろんしているわけですから、その生産基盤に役立てていくということでもあります。少しでも経営基盤の中にプラスしていくと。そういう位置づけの中で、6次産業化を入れていくということを考えてやっております。その中で、一つ大きな取組として今進めていることがあります。

資料5-4であります。第3回十勝中札内グルメフォンドという自転車のイベントでございます。2015年は3回目になりまして、1回目は2013年ということでもあります。これこそが、今私が進めている6次産業化を更に線で結びつける動きのイベントであります。1回目は200人の参加者があって、今回の3回目では、3枚めくっていただくと、地域別参加人数ということで出ておりますけれども、これを見ていただくと、本州からも色々参加していただいている状況があります。3回目においては756人という大変大きな人数の参加をしていただいている状況であります。

こういったことが十勝毎日新聞にも掲載されておりましたが、道の駅の入り込み客数に大きく役立っているイベントだということも掲載されております。こういう取組が地域間のそういう動きに変わって、最終的にはみんなの点に色々効果をもたらしていくのではないのかなというふうに思っております。その中で、地域の協力はもちろんのことなのですが、その他にも例えば益子直美さんという元プロバレーボールの女子選手でありますけれども、そういう方、またロードレーサーの、今は現役に戻っておりますけれども、岩本さんという方にも協力していただいて、更にこういうイベントを盛り上げて、今進めているところであります。

こういったことが最終的に地域の活性化に結びついていくものだとことを考えておりました、私が今6次産業化の1回目の認定事業であります、総合事業計画の中でもこういう地域活性化の取組の一つとして、こういう動きを今進めているところでございます。本年が5年目の年となっております、このような結果を逐次報告しながら、地域に反映していきたいというふうに思っております。

以上でございます。

○中嶋氏 ありがとうございます。

それでは、続きまして、正保様よろしく願いいたします。

○正保氏 改めまして、帯広大谷短期大学で教員をしております正保と申します。

帯広大谷短期大学というのは、場所は音更町にあります。元は帯広市にあったのですが、今は移転しまして音更町にある短大です。

大きく三つの科を持っていますが、地域教養学科という学科と、それから生活科学科というところでは、栄養士の養成課程を持っています。もう一つ社会福祉科というところでは、二つの専攻がありまして、一つは子ども福祉専攻で、幼稚園教諭と保育士のダブルの資格を取れる専攻と、そして私が所属するのは介護福祉専攻というところでして、介護福祉士の養成一本を図っているそういった専攻があるのですけれども、そこで教員をしております。

今、人材教育担当副学長という役職も拝命しているのですけれども、実はこれは特命ということにして、何が特命かといいますと、皆さんも御存じかと思うのですけれども、今、介護の現場で働く介護福祉士という専門職のなり手が激減しているというような現状がありまして、そういった人材を発掘せよという特命を受けて、今の役職を仰せつかっているのですけれども、今、全国でも400校前後ある養成施設の中での定員の充足率というのは6割いっていただければいいほうというところで、その中でも社会人の入学生というのがかなり多く占めているようなところもありますので、ストレートに高校から入学してくる学生を見ると、50%を切っている学校が圧倒的に多いということでは、学校の存続の危機感もありますけれども、介護の現場を支える専門職の養成というところでは、本当に大きな危機感を持ち、養成校だけではなくて、地域も含めて一緒に考えていただきたいということで、今課題を持っています。

一方、施設の方は、本当に人材難ということで、人材確保に奔走しているという声を沢山いただくのですけれども、その板挟みになっているような学校の現状もあります。施設で働いている職員の方達の介護福祉士の専門職の割合が4割しかいないという言い方がいいのかわかりませんが、本来であれば、専門職で賄いたい職員が4割しか確保できていないです。しかも、その専門職としての介護福祉士の養成ルートというのは二通りありまして、養成校への入学と現場を経験して国家試験を受けるというルートがあるのですけれども、その中で、養成校出身で働いている専門職が1割しかいないということで、少し前までは金の卵みたいに言われていたのですけれども、今はもっと希少価値が高くなりまして、金ではなくて、プラチナとも言われるような、手に入ったらラッキーというぐらいの現場での感覚を持っているという話を聞くことがかなり多いです。

その背景には、高校生の介護だけではなくて、福祉の分野への興味・関心の低下というのがかなり強いのかなということは、色々な情報からと、現場の声を聞く中で、今そこが見えてきたところなのです。そこを何とかしようということで、今動いています。

一方で、短大としてはということなののですけれども、地域というキーワードを掲げて学生の教育に当たっています。もう一つは、地域貢献をしながらということと、地域とつながりを持つ中で学生が大きく育ってくればということと、その中では地域づくりに関心が持てる学生を育てようというところで、最近の傾向というか、短大として力を入れているのは、資料に添付しましたが、「E s p e r a n z a」という短大の広報誌のナンバー36の方なののですけれども、開けていただくとトピックが二つありますが、一つは高校との連携協定を結んでいます。資料にありますのは音更高校なののですけれども、これから幾つか十勝管内の高校と連携協定を結んで教育に携わりたいということが一つと、3ページなののですけれども、尽誠学園の香川短大との大学間の協定というのを結んだばかりということで、連携の実践がこれから始まっていきます。

更に、地元の農業団体や商工団体とも、これから連携協定を結んでいくという予定もあります。そして既に、地元というのは音更町なののですけれども、音更町さんと総合の連携協定を結んでおりまして、その中で短大の現状を知ってもらおうということで、学生というか、特に介護の学生が激減しているというところを御相談したりとか、情報提供する中で、「E s p e r a n z a」のナンバー35を開いていただいて、2ページなののですけれども、ふるさと納税の一部を、短大に進学する、介護を目指してくる学生に、ふるさと介護福祉士育成支援事業として、学生に直接学費であったりとか、テキスト代、実習費等の支援をしていただいたという、本当に稀な取組をしていただいています。この波及効果が今少しずつ出てきているかなと思うのですけれども、地元の十勝管内の首長さん達に、うちの学長が実情を知ってくださいということで、色々協力させてくださいというお話をする中で、奨学金の制度をどんどんと立ち上げてくれる町村が増えてきているというところでは大変ありがたいと思っているのですが、こういった活動を通して、地域とのつながりというのはやっぱり大事な点。学生にこういった形で支援していただくのは、学生もと

でもありがたく思っていて、関心が地域により向くようになってきたかなという実感を今持っているところです。

私たちが今目指しているのは、地域づくりにも関心を持てる学生を育てるということを中心に、私の立場で言えば、介護福祉の養成ということでは、一般的には介護福祉士は施設の中で働くというイメージを持たれていると思うのですけれども、それだけではなくて、地域で、もちろん在宅も含めてなのでも、自分たちが考えていることを発信できる、そういった学生を作る。地域型介護福祉士と私たちは命名しているのですけれども、そういった学生を育てようと今努力しているところで、今回こういった機会を与えていただいて、色々勉強させていただけるかなというふうに思っていました。よろしくお願いします。

○中嶋氏 ありがとうございます。

それでは、中川様お願いいたします。

○中川氏 ノラワークスジャパンの中川と申します。

まず名前が、ノラワークスジャパンというのは何なのだろうという方が多いと思うのですけれども、野良仕事、そして初めはノラワークス十勝とか、北海道と考えていたのですが、どうせなら日本にしておこうということで、ノラワークスジャパンというふうに名前をつけて、今農業をやっております。

それでも、農業というと、この辺でできるものを作るというのが通常ですけれども、平成22年にあるイベントで宮崎の日南というところにお伺いをしまして、その時に、たまたまそこに参加された農家の方がマンゴーを作っていて、マンゴーを作るなどということは、今は作っていますけれども、その時は全く考えていなくて、その方が、宮崎で端境期である12月にマンゴーを作りたいのだけれどもつくれないというふうに言うのですね。その時に私は、「何言っているのかな」なんて思いながら話を聞いていたのですけれども、聞けば聞くほど訳がわからなくて、「何でできないのですか」とお話をしたら、何と言ってきた言葉が、「ここは南国だからできないんだよ」と。南国のものが南国でできなくて何ができるのかなんていうふうに思っていたのですが、実はそれはちゃんと植物のサイクルというものがあって、彼が言ったのは、北海道ならできるというふうに言ったのです。

私、28歳から青年会議所でまちづくりというものに携わって、それから40歳で卒業なので、それから商工会の青年部というところで、まちづくりにずっと関わってきたということで、自分のことよりもまちづくりというような形でずっと20年近くやってきたものですから、その延長でノラワークスジャパンというのを地域に新しい産業を興そうということで、マンゴーづくりに入ったのですが、今日の会議名の中に、価値というものがありますけれども、実は私これをやることによって、すごい北海道の価値があるなというふうに感じてきています。

私の紹介の中に、カスケードというエネルギー活用のお話が出ていますけれども、実はこ

のカスケードというのが、最終的に北海道の農業を変えられるのではないかというふうに思っています。

私の資料、内容がかなり長いので、これを見ていただいて、私が何を言いたいのかというふうに感じていただければいいのですけれども、まず、私が一番最初に考えたのは、マンゴーという部分で、12月の何もない十勝、雪しかない、寒いというだけの所に、何か価値が得られるのではないかということで、マンゴーを作ったらどうだろうということで始めました。

ただ、その中で一番最初は、色々な方に相談したのですけれども、本当に家族、友達にまでも、とうとうきたかというような形で、私もかなり折れそうにはなりましたが、その時には、やっぱり自分の中でびびびっと来たものがあって、これはいけるというふうに思ったのです。

それはなぜかといいますと、このエネルギー活用をずっと一連の中で考えた中で、先ほどのサイクルという部分で考えますと、宮崎で例えますと、宮崎で11月、12月、1月に通常の冬という感覚を、マンゴーでいえば冬というふうに感じて、そして開花につながっていく。そして、マンゴーがその中で5月、6月に出荷時期を迎えていくと。そして先ほど宮崎は南国だからできないという意味はここにあって、私たちが12月に作るとなれば、当然それから逆算しますと、6月、7月に「冬だ」というイメージを与えなければいけないというふうになっています。ただ、北海道でも、十勝でも、6月7月というのは、気温がそれなりに上がりますし、当然、路地生産ではありませんので、ハウス生産でやります。ですから、ハウスの中はもう三十数度になってしまいますので、彼らに冬というイメージを与えるというのはなかなか難しいということで、雪氷の利用を考えました。雪氷という部分でいくと、冬、我々の身近な農業という部分では、酪農家以外の方たちはほとんど遊んでいる状態、休眠状態で、その時に私たちは雪を集めたり、そういう仕事をして、そして夏場のエネルギーとしてうまく活用すればいいのではないかと。

ただ、その中でも十勝の場合は、6月という時期は最低気温が大体10度前後ぐらいになりますので、雪氷の利用と自然の10度前後の温度をうまく利用することによって、開花を促進できるということが分かりまして、そうすることによって12月にマンゴーを作ることができたと。ただこれは、12月に作るということをやろうと思えば、当然宮崎でもできないことはないのですが、コスト面、それから無駄なエネルギーを使うということで、なかなかやっぱり難しいということで、先ほど言った南国だからできないという意味はここにありました。

ただ私たちは、最初の取っかかりとしてマンゴーを始めたのですが、今の考え方はマンゴーというのは一つの通過点であって、マンゴーを作りながら色々な形で冬の生産ができるということが分かったものですから、これは今までの北海道の芋、豆、小麦とか、そういうものを作っていけると。そして、今度冬に生産をするということは、これがカスケード利用をしながらエネルギーをうまく利用していくということで、冬にできることを私が

証明していますので、1年間通して農業ができるだろうということです。

その中で、農業が年間通して雇用の場もきちっとできていくというふうに私は今考えていまして、その中で先ほどのお話の中で、北海道に憧れて移住をしようという方たちが、北海道の農業に従事しながら自分の家庭をとという方も結構おられるのです。ただ、そういう人たちが挫折して帰るのは、やっぱり普通の酪農以外の畑作という部分のイメージでいくと、三、四カ月の仕事しかないという部分でいくと、我々のようなこういうことも組み入れた農業ができることによって、1年を通して仕事ができるって、農業という業がきちっとした1次産業としてなっていくのではないかなということで、今は色々な講演活動とかしている中でそのように感じて、農業が1次産業であれば、1次産業なりとして仕事の創出もできるような形になって欲しいということで、私は今、そちらの方を一番考えながら活動しております。

○中嶋氏 ありがとうございます。

それぞれ皆様の活動については大変興味を持ちまして、ここで色々質問したいところなのですが、ちょっとお時間の関係もありますので、最後に、総合討論の時にそういう場が持てればと思います。

4. 国土交通省北海道局説明

○中嶋氏 それでは、議事次第の4番目になりますけれども、新たな北海道総合開発計画の中間整理の概要について、事務局から説明していただきます。

その後、この中間整理、あるいは新計画や行政への期待に関して、出席者の皆様から御意見を頂戴し、その御意見を基に、更に意見交換をさせていただければというふうに考えております。

それでは、国土交通省北海道局から新たな北海道総合開発計画の中間整理について説明していただきます。お願いいたします。

○横田企画調整官 私の方から15分程お時間をいただきまして、新たな北海道総合開発計画の中間整理について説明いたします。

中間整理の本文といいますのは、資料2-2というものがございます。全部文章ですけども、42ページございます。ちょっと時間が足りませんので、説明は概要をまとめた資料2-1を使ってさせていただきます。

資料2-1の1ページをご覧くださいと思います。

こちらが、計画づくりのこれまでとこれからの流れを書いたものでございます。局長の挨拶にもございましたけれども、今年1月に国土審議会北海道開発分科会で新たな計画の検討がスタートいたしました。本年2月から7月まで、5回議論したものを中間整理としてまとめております。

計画部会には、本日御出席されている中嶋先生、神田先生を始め、15人の委員の方に構成していただいて、御議論をいただいております。また、右にありますように、東京の

審議会だけではなく、北海道での議論ということで、このパートナーシップ会議を太田国土交通大臣御出席の札幌開催をキックオフに、春に、合計５都市で開催し、中間整理はその時の御意見も踏まえて整理をしたものでございます。秋は、函館、釧路、旭川と回りまして、本日の帯広での開催が最終回となっております。この後は、パートナーシップ会議の意見も踏まえまして、更に計画部会で議論を続け、計画の素案というものを作成しまして、来年春の閣議決定を目指していく予定でございます。

続いて、２ページをご覧ください。

このページは、中間整理のポイントをまとめたものです。

北海道の開発といいますのは、北海道の資源特性を活かして、その時々々の国の課題の解決に貢献するとともに、地域の活力ある発展を図るという趣旨で行っています。

そうした観点から、左の上は、北海道の現状、国から見た北海道の強みということについて主に書いています。一つは、我が国の食料供給基地ということです。ここ十勝は、我が国における代表的な畑作酪農地帯ですけれども、北海道には馬鈴薯、生乳、水産物ではホタテ貝など、全国一位の生産量の農水産物が多数あります。

二つ目に、食の輸出、外国人観光客のいずれもが急増しています。しかも、ここに書いてあります伸び率は、全国の伸び率を上回っております。ホタテの事例がありますけれども、輸送技術や高度な衛生管理、また交通ネットワークの整備の進捗などもありまして、冷凍だけではなく、生の輸出も増えてきているのが最近の特徴かと思います。外国人旅行者は、東アジアはもちろん、タイなど東南アジアで北海道の人气が高く、増加しております。

一方、右上ですけれども、国全体で人口問題に対する危機意識が高まり、地方の創生が大きな課題となっておりますが、北海道は全国よりも１０年先に進展し、いわば課題先進地となっております。グラフは、赤が北海道の人口と高齢化率、青が全国です。北海道の人口のピークは平成９年、現在人口が５４０万人ですから３０万人既に減少しております。今後２０４０年に向けての減少スピードも、加速するという予測になっています。

また、北海道は、本州とは距離感が異なる広域分散型社会でございます。この地図は、北海道の地図と本州のものを重ねたものです。札幌から根室間の距離は、大阪と東京の間と同じ程度の距離、ここの帯広はイメージとしては名古屋ぐらいということですが、その間の人口の集積は大きく異なっております。

こうした現状と課題を踏まえまして、下の段の左側になりますけれども、北海道の戦略として、アジアなどで拡大する海外市場、世界に目を向けて食・観光を戦略的産業としていくということです。しかしながら、農林水産業を担う地域は、北海道の地方部になります。また観光も十勝平野に代表されるような雄大な農村景観をイメージしますと、北海道らしい観光ができるのは、こうした第１次産業が営まれているような地方部にあります。国に貢献している農林水産業や観光を担う地域を生産空間と名づけまして、これを維持・発展させて、世界の北海道を目指すということを、これからの北海道の戦略としていま

す。

こうした戦略を実現するために、新計画の重点的な取組として、生産空間を支える重層的な機能分担と交通ネットワークの強化、また農林水産業の競争力・付加価値向上のための取組や世界水準の魅力ある観光地域づくりのための取組を強化していきます。

都市の機能維持と交通ネットワークについては、全国の国土形成計画というものがございいますが、こちらではコンパクト＋ネットワークと言っております。ただ、北海道の農村は非常に広域に分散して、またそこに居住する場合には、散居と言っておりますが、分散して居住しているということで、一律に市街地に集住するということはない可能性がありまして、北海道特有の地域構造が必要と考えられます。

右端の図になりますけれども、生産空間を一定程度の生活サービスを提供する地方部の市街地や、医療・教育・文化・商業等の少し高次の都市機能、生活機能を提供する圏域中心都市で支える３層構造の基礎圏域を北海道版の地域構造として想定しています。

続いて３ページのシートをご覧ください。

こちらは、中間整理全体の構成、目次を示したものです。

右上に第１章の第３節、新たな北海道総合開発計画の意義がございします。次期計画の計画期間は１０年を想定していますが、この１０年の期間を生産空間のサバイバル、地域としての生き残りをかけた期間であると位置づけてございします。一方、来春に北海道新幹線が函館に開業する、あるいは、高規格幹線道路が道東に延伸していくといった期間でございまして、地域の飛躍の契機となし得る期間でもあると認識して、本格的な人口減少社会にあっても、活力を失うことなく人々が豊かな暮らしを送ることのできる地域社会の先駆的な実現を図るということを次期計画の意義としております。

真ん中の黄色い部分は、計画の目標でございします。

「世界の北海道」をキャッチフレーズとし、２０５０年を見据えた世界水準の価値創造空間の形成を目指していくということをビジョンに掲げております。目標については三つ、人が輝く地域社会、世界に目を向けた産業、強靱で持続可能な国土としております。

また、左の下の方の第３章、計画推進の基本方針の第２節の基本的考え方のところでもございしますけれども、先程の北海道型の地域構造の保持・形成、これで人の生活を支えていくということ、また、人こそが人口減少時代にあってもは資源であるという、この２点を強調しております。

続いて、４ページの方で、具体的に何をやっていくかということピックアップして御説明します。

最初に、一番目の目標、人が輝く地域社会の形成についてです。

まず、北海道型の地域構造の保持・形成についてですが、こちらは、オホーツク地域を例とした基礎圏域のイメージを示しています。ここ十勝では、帯広が圏域中心都市というイメージで大変わかりやすいのではないかと思います。こうした基礎圏域が北海道では２０ぐらいあるというふうに想定しております。各エリアで長期にわたり住み続けられる環

境を維持・創出して、人口の流出を抑制するダム機能と、一度都市部に出た人材も地方部に戻ってくるといった人口の還流を図るポンプ機能を強化するという考え方でございます。

その左下には、北海道の価値創造力の強化についてです。

地域の女性や高齢者など多様な人材の活躍の場を作る、あるいは道内外で外国人なども含めた多様な協力人材の発掘や交流を促進することなどにより、活動人口を確保していくという考え方でございます。

次に、2点目の目標、右上にあります世界に目を向けた産業の振興についてです。

まず、農林水産業・食関連産業の振興では、就業者の減少や高齢化などに対応し、生産性を向上させるために、ロボット技術やICTの活用など、また農地の大区画化など生産基盤の整備の推進を図ります。また、食の総合拠点づくりと書いてありますが、これは農業の生産性の向上を進める中で、農村を維持していくために、農業界と経済界が連携して、地域経済、雇用への効果が期待できる食品工場の立地を各地で進めようとするものです。

先行事例として、帯広にはカルビーポテトの加工工場などがございますが、こうした高品質で大量の原材料を提供できる北海道の農業生産の強みを活かして、道外などからも誘致を進めようというものでございます。

次に、右側、世界水準の観光地の形成です。

北海道新幹線の開業や東京オリンピックなどの機会を活用し、魅力ある観光地づくりを進めていこうということでございますが、一つの課題として、外国人旅行者の宿泊が道央圏などに集中している、あるいは夏と冬にピークがあって、春と秋は落ち込むといった問題がございます。国土交通省では、この6月にここの十勝川温泉地域も含めて、東北北海道広域観光周遊ルートというものを認定しております。こうした計画を推進したり、また、その地方部に外国人旅行者を誘導する仕組みとして、ドライブ観光の推進などを進めたいと考えております。

最後に、下の段、3番目の目標であります強靱で持続可能な国土の形成です。

北海道に豊富に賦存する風力や地域のバイオマスを最大限に活用するということで、水素なども活用して、地域分散型のエネルギーシステムの構築を目指すということで、今年の5月に北海道開発局の方で北海道水素地域づくりプラットフォームというのを立ち上げており、産学官の連携の取組を始めております。

また、右側の安全・安心な社会基盤の形成ということですが、去年は道内でも初の大雨特別警報が発令されたり、道東を中心として暴風雪や高潮の被害など北海道においても災害が激甚化、多様化する傾向にあります。そうしたものの対応、また冬期の災害対応も進めて参ります。

中間整理の概要説明は以上になりますが、最後の5ページ、6ページは、計画策定後の今後の展開について少し触れております。

5 ページですけれども、「プラットフォームについて」とあります。計画を推進する方法として、多様な主体が連携・協働して、持続的に取り組むことが重要だということで、食の総合拠点づくりや水素の地域づくり、外国人ドライブ観光の振興など、こういった色々なテーマで関係者が一丸となって取り組む組織体を北海道全体で、あるいは北海道各地でも、それぞれ地域にあったものを作っていきたいというふうに考えております。赤い字で、北海道価値創造パートナーシップ会議と書いておりますけれども、このパートナーシップ会議に参加されているような地域の課題解決、活性化に携わる方々との交流や連携、これを来年度以降も展開していこうというふうに考えております。

6 ページの方は、そのロードマップのイメージでございます。

道内各地域での取組を進めるとともに、世界水準の取組やフロンティア精神を発揮した優良な取組の情報発信なども進めたいというふうに考えてございます。

説明は、以上となります。

5. 意見交換

○中嶋氏 ありがとうございます。

今、御説明いただきました新たな北海道総合開発計画の中間整理について、この後、お集まりの皆様から御意見を頂戴したいと思っております。

当初の予定では、まず中間整理について絞った御意見をいただき、その後、北海道総合開発計画全般、それから北海道の開発計画に関わる行政への期待というものを改めてお聞きしようかなと思っていたのですが、多分それぞれ密接に関係すると思いますので、まとめてお話をしていただければというふうに思っております。その後、もし言い残したことがあれば、改めて御発言の機会を設けたいと思いますので、とりあえず順番にお話をいただければ幸いです。

では、先程と逆順になりますけれども、中川様から、今申し上げましたように、中間整理への御意見、それから北海道総合開発計画や行政への期待ということで、御発言いただければと思います。お願いいたします。

○中川氏 先ほどお話しした中で、農業という部分は、非常に北海道では欠かせない部分だと私も思っているのですが、先程の資料の4 ページに、就業者の減少という部分があると思うのですが、これは私もそうは思うのですが、先程言ったように、三、四カ月しか仕事がないということで、天候の不順によっては、今日は仕事がないとか、やっぱり安定していないというところが一番難しい、厳しいところになってしまって、そういう安定がないということが一番魅力をなくしていくという部分があると思いますので、その辺を何か、6 次化をやっている岡本さんとか、そういうことがあることによって色々な部分で農業をやりながら6 次化もやっているというような形で、色々な仕事ができる、仕事があるというような形が必要かなというふうに思います。

それから、この事業を始めて分かってきたというか、私の考えなのですが、先程カル

ビーボテトチップスの会社のお話が出ましたが、あの会社は、確か農地に持っていった、十勝でも珍しい工場だと思うのですが、エネルギー活用では、工場の中で暖房と、それから職員さんのお風呂だとか、そういうものにエネルギーを使っていると聞いたことがあるのですが、工業団地に工場を持ってくるのではなくて、それこそ、そういう場所に持っていくことによって、そこからエネルギーが出る、どれだけのエネルギーを持っているから、この場所に工場を誘致して、そこに出たエネルギーをうまく活用しながら、今、鹿追で、バイオマスプラントでマンゴー事業だとか、チョウザメ事業をやっていますけれども、ああいうような部分で、そこから出るエネルギーをうまく最後の最後まで使い切るというような戦略をとっていくということで考えると、誘致することただ単に工業団地に持ってくるのではなくて、エネルギーをうまく活用できる企業をうまく北海道の農地に持って行って、その周りにエネルギーをうまく活用していくという形が、日本のエネルギー不足の部分を何とか補えるのではないかとということと、先ほど言った、1年を通して仕事をつくれるエネルギーを創出できる、エネルギーを使って仕事を創出できる、農業がちゃんと1年間通して色々な形の農業ができるというのが、北海道に価値があるという部分だと私は思っています。

その価値というのは、これを宮崎で例えますと、宮崎で米だとか芋だとかを、北海道十勝のような形で作ることは難しい訳ですよ。ですから逆に言うと、北海道で、先程言った、夏は通常の農業をやって、冬にはこういう価値のあるものをつくれる。そして価値のあるというのは、私のところで、今は1アールのマンゴー畑なのですが、大体小麦、芋だとかというのは、1アール当たりは8万円ぐらいの生産量、生産金額。私のところで昨年12月初出荷というか、初めてのビジネスとして出した金額は1アールで800万円の売上を上げているということで、今年の目標は1,200万円というふうに考えています。本当に1アール、2アールでそれだけの価値のものを作れるということは、冬もきちっとそういう狭い場所で価値のあるものを作って、今までの農業は農業で夏にやっていくということで、1年間通した仕事と、それから農業者の収入も得られるということで私は考えています。

それから、行政に対しての意見については沢山あるのですが、私どもは地域づくりでやってきたので、当然誰も考えていないようなことをやったということで、今は色々な行政の部分だとかバックアップはあるのですが、ここまでくるのに3年ぐらいは、自分らで全部自前で、色々な実験をしながらやってきて、やっとビジネスモデルになってきていますので、その前に我々がずっとやってきたことに対して、自分たちが自前でやってきたものですから、非常にお金の部分では辛い思いをしてくれています。今も当然辛いのですが、そういう部分で、新たに新しいビジネスをやってみようといった時に、なかなかそういうものの枠がなくて、新しい可能性があるかなというものに対しての補助金だとか、そういうものがもっと幅広く、これと決められてしまっているものですから、これには当てはまるものはありませんよねということで終わってしまうという状況がありますの

で、何とかもっと幅広く考えてもらえるような、何かバックアップしていただけるようなことがないのかなというふうに思っています。

最後に、私たちが今考えているのは、ノラワークスジャパンが生産を上げて、売上を上げて、そして儲けようというふうには全く思っていないくて、儲けたものは違う次のまちづくりのためにお金を使おうと思っているものですから、そういう部分で、先ほど講演活動をしていると言ったことは、新しい生産者を作っていきたいという思いで色々なところでお話をしています。

先程の鹿追町も私たちの願いが一番先にかなった一つ目の工場で、バイオマスプラントから出るエネルギーを使ったマンゴーハウスは、まず1号の生産者になったと。生産者をどんどんどんどん増やすことによって、この地域に産地化をしなければいけない。我が社1社でやっても産地化とは言いませんので、色々な方たちが携わってくれることで産地化になっていくというふうに思っていますので、色々な部分で協力いただきたいなというふうに思います。

以上です。

○中嶋氏 ありがとうございます。

それでは、正保様お願いいたします。

○正保氏 私の方からは、普段学生の教育に関わる中で気づいたことと、あとは範囲が狭くなってしまうのですけれども、介護とか福祉の分野で、施設の職員の方たちと交流する中で気づいたというか、声をいただいているようなところを中心にお伝えしたいなというふうに思います。

一つ目は、計画全般に関係してくるような高齢者の捉え方というか、どうしても人口動態的には65歳以上を高齢者という括りになってしまうのですけれども、その括りで、高齢化とか、超高齢化というようなことで問題視されがちになってしまうのですけれども、実は、高齢者の方と関わる中では、現役で仕事をされている方ももちろんいますし、逆に現役をあえて退いて残りの人生を楽しみたいのだという方、実は短大の方にもそういった高齢者向けのプログラムを作ってくれないかというような声も上がってくるぐらい、自分の人生をどう生きるかというところを主体的に考えていらっしゃる高齢者の方達もいらっしゃるというところが最近になって伝わってくる状況がありまして、そういったところで、高齢者が活躍できる場を作っていくということで計画には書かれていたのですけれども、それをもっと細分化していただければなということで、一つは今言っていた元気だといったらおかしいのですけれども、そういった主体的に動ける方達に対する何か地域づくりみたいなところがあればいいのかなというのが一つと、もう一つは、逆に、今言ったのは多分前期高齢者に相当する方達なのですけれども、どうしても後期高齢者になってくると疾患を抱えるであったりだとか、中でも認知症を抱えてという方達も増える中で、認知症を抱える方達の半数は、地域というか、施設ではなくて、在宅で暮らしているというデータもある中で、そういう方達の声を聞く中では、そういった方達への特別な支援とい

うことではないのですけれども、地域づくりとしてそういった疾患を持ちながら地元で生きたいというか、生活したいという方達の思いをどういうふうにまちづくりに反映できるかということと、更に、その本人だけではなくて、家族を含めてという、そういった単位の見方というか、そういったことに目を向けた施策というのがあればいいのかなというところを感じていました。

それから、もう一つは、教育の分野に今いるのですけれども、学生を通して感じることもありますが、短大は十勝にありますので、十勝から入学してくる学生がほとんどなのですけれども、管外からも入学してくる学生もいるのです。地元愛が強い学生と、そうではない学生が二分しているなという、これは実感なのですけれども、それは単純に、例えばずっと地元で長く育っていたということとか、逆に、転勤してきたからということ、それだけではないのではないのかなと最近思うようになっていまして、地元愛が強い学生は必ず地元の話をし、地元で最終的には戻りたい、今は十勝で就職するのだけれども、最終的には地元で貢献したいんだ、地元で恩返しをしたいんだというふうに言う学生が結構目立って、その違いというのは何なのかなというふうに考えると、もしかしたら、個人の問題ではなくて、地方自治体が自分たちの町をどんなふうに子供たちや地域住民に伝えているのかなというところで、もしかしたら、そこが根強く、学生がそういう愛着を地元を持って、自分は移動はするけれども、地元愛が強く持てているのかなというところを考えると、そういった取組が各自治体に任されるのではなくて、各教育家に任されるのではなくて、北海道学というテーマも出ていましたけれども、そういったことがもっと浸透していくと、子供達もしくは学生が北海道愛とか、地元愛を持って、自分がその個人の一人であるという自負ができたとか、そこから何か発信するといったことがもしかしたらできるのかなと。今は短大の中で、学生の話を見ると、小さなそういったコミュニティの中でも発信力というのは全然違うので、そういったところの力のつけ方というのはどこかにあるのかなというふうに考えたりしていました。

それからもう1点は、これは本当に狭い範囲になってしまうのですけれども、小さな町村にある施設の職員さんは、利用者の方がもしかしたら最終的に集まらなくなるかもしれないという危機感を実はもう一方で持っていて、職員だけではなくて、利用者も確保していかなければという危機感も持っていて、その中では家族ごとの移住というところを考えたり、もしくは動いているというようなことも耳にするのですけれども、それは本当に何をどう整えていけば、そういったことが実現できるのかというところは、とても考えつかない部分も多いのですけれども、そういった現場の声というのが届くようなシステムというか、それだけ地方は色々な課題を抱えているのだなというのは、自分も足を運んで話を聞いて、そうだったんだと思うようなことも多くて、そういったことが一つ地方という一括りになってしまうよりは、もう少し個別のというか、そういった地方の見方もあるといいのかなと。更にはもっと小さな企業だとか、団体とか、それから今言った福祉施設なんかの声が伝わっていくようなシステムが、もちろん今もあるとは思いますが

も、そういったことがもっと強化されていくといいのかなというところがあります。

それで、最後をお願いなのですが、教育機関としては、学生の育成の中で、今回も私はここに参画させていただく中で、初めてと言ったら語弊があるのですが、道の計画であつたりとか、今回の中間整理だつたりというところに具体的に深く触れるという機会を設けさせていただいたというのはとてもありがたいのですが、それがもしかしら、こういう機会がなければ、通常の業務の中だと、そこは流れていくような、もしかしらそういったものだったのかなと思うと、自分の中で先入観として、国や道の計画に携わるようなそういった自分は存在ではないのだというふうにどうしても思いがちであつて、それはきっと一般的な考えなのかなというふうに思うと、その距離感とか、温度差の違いというところをどう埋めていけるのかなというところでは、学生はすごく多感な時期で、色々な刺激が入ると、本当に無限の可能性を持っているのではないかなと思うぐらいどんどん伸びていくようなそういう資質を持っている、そういう人材に直接関わっていただくような、そういった機会が沢山あるとありがたいかなというふうに思つて、この計画を見させていただきました。

以上です。

○中嶋氏 ありがとうございます。

それでは、榊様お願いいたします。

○榊氏 私からは、農業という部分についてお話しさせていただきたいと思いますが、中間整理の中でいきますと、第2節の世界に目を向けた産業振興にも最終的にはつながっていくというふうに思っております。

農業の中で、持続可能な農業をこれからつないでいく、また後世にそれをつないでいくということになっていくと思いますが、何せ農産物にしても、食の加工品にしても、我が国の中で安全・安心な仕組みづくりを、これはどうしてもやらなければならないというふうに思っております。

それはなぜかという、やっぱり国産のものを流通させるためには、消費者に食の安全・安心を理解していただいて、その価値を分かってもらふということがとても重要なことだと思っております。それがお互いの流通に変わって、日本の国内の中で色々活性化に変わっていくというふうに思っております。安全・安心立国を作ることによって、最終的には海外の投資家だつたり、そういう富裕層に安全・安心な食に対しての視線が向かれますので、向かれた際には日本の中に住んでいただく方も出てくるかもしれませんし、人口増加、先ほど減少という話もありますので、そういうものにもつながっていくのではないのかなというふうに思っております。

そういったことを理解していただくためには、輸送手段というのはこれはとても重要なことでもあります。輸出をするという食べ物、日本のいいものを理解してもらふということは、海外に安価な輸送ルートを作る。地域間の輸送体系を作っていく。例えば港と食の生産される場所のルートを構築していく、また空港事情もそうだと思います。そういうこと

を整備していくということがこれから更に必要になっていくのではないのかなというふうに思っております。

更には、自分の付加価値の取組である加工一つ取り上げても、更に付加価値を高めていくということを考えていった場合に、例えば私の農場に来ている水、札内川ダムという水があります。この水というのは、清流日本一に7回も輝いたとてもきれいな水であります。そういうもので例えばタマネギを作って、その水を使って生産している。そういうことが、最終的には付加価値にも変わっていくということにもつながっていくと思いますので、そういう農業生産整備もこれからとても重要なことになっていくのではないのかなというふうに思っております。

また、一方で、先程お話ししましたけれども、自転車という話をさせていただきました。この自転車というのは、先程もお話ししたように、点を線で結ぶ、そういう大きなとても重要なイベントだというふうに思っております。それは食をつなぐということで、今回のイベントについては、地域の特産品を食べてもらいながら自転車という一つのツールを使って、皆さんに楽しんでいただくという地域活性化型のイベントであります。そのためには、道路事情も自転車に優しい道路事情でなければならないというふうに思っております。例えばマンホールというのでしょうか、グレーチングで自転車が挟まるような、そういうような事情であっては、なかなか安心・安全な自転車交通事情でないというふうに思っております。また、走るスペースにおいても、車道優先ということになっておりますので、その部分についても自転車を考えた安全なそういう交通事情も考えていくことが必要だと思えます。

更には、食を道の駅という一つの位置づけということを考えたときに、例えばJAの直売所だったり、そういうところを道の駅というような形に位置づけることによって、自転車交通網ができると。そういうようなことも考えながら、地域活性化の中身を進めていくということがとても重要になってくるのではないのかなというふうに思っております。それが、最終的には食という大きな形に変わり、海外の方に更に来ていただけるようなそういうことに変わっていくのではないのかなというふうに思っております。

以上でございます。

○中嶋氏　ありがとうございました。

それでは、片山様お願いします。

○片山氏　私からは、2点焦点を絞ってお話しさせていただきたいのですが、1点が移住というところで、もう1点が道というところなのですが、この移住と道というところが、ちょうどちの出している雑誌の「スロウ」で特集としてテーマを組んだ時に、すごく反響の大きかったテーマの二つなのですね。それが今回の開発計画にもすぐリンクしてくるなと思ったので、それについてちょっと話させていただきます。

まず、移住に関してなのですが、私たちが取材をしていく中で、かなりの割合で道外からの移住をされていらっしゃる方々にお会いすることがあります。関東圏だった

り、関西圏だったりという方が多いのですけれども、そういった方々が他の移住希望の方の相談に乗るといようなシーンが多々あるようで、そういった際に、どういったアドバイスをしているかというところでよく聞かれていたのが、来た後に、長く居続けることが一番難しいので、そこをきちんと考えた上で来なさいと言うということをよく聞きます。手放しでおいでおいでということは決して言わないというような話を、その特集を組んだ時に聞かれました。その特集で反響が多かったというのも、恐らくはそういった実際の情報ですとか、今移住して暮らしていらっしゃる方々の声をいうのをなかなか皆さん耳にする機会が少ないからこそ、私たちの本に対する反響があったのではないかなというふうに考えておまして、色々と海を越えて、移住されてくる場合には、困難なことも多いと思いますので、そういったところをまずきちんと事実を伝えていくというところが、人口減少の問題もありますけれども、そういったところで必要になってくるのではないかなと思っています。

制度的なものですとか、そういったハード面というのですかね、そういったところはもちろん必要なのですが、その後で実際に暮らしていくイメージを持てるような情報発信の仕方ですとか、そういった機会を設けるというようなことが非常に定住という意味では必要になってくるのではないかなというふうに考えております。

今は、そういった情報発信の上手な地域という言い方はちょっと語弊があるかもしれないのですけれども、結構そういったところを取り上げている地域に移住の方々が多く密集してしまうですとか、そういったことも聞かれておりますので、それをもう少し全域に分散といいますか、求めている方が求めている土地に出会えるような、何か仕組みというか、そういったものがあるといいのかなというふうに思います。

もう1点が道というところなのなのですが、美しい道を紹介するような特集を組んだのですけれども、これに反響があったというのはちょっと意外なところが私たちとしてもありまして、目的地から目的地の間に通る道の、例えば真っ直ぐな道だとか、両側に畑が広がっているようなきれいな道ですとか、並木道ですとか、そういったところを御紹介したのですけれども、それが道外の方から良かったという声を沢山いただきました。

そこで感じたのが、観光地に行くのはもちろんなのですが、先ほど距離感の差があるというお話はありましたけれども、そういった中で、やはり移動時間がすごく観光の際には長くなってしまうと思うので、その間の景観というのはすごく旅の印象に強く残るものであると思います。なので、特に観光地ではない、ただの通りすがりの風景といったところに対しても、配慮しつつ整備していくということがすごく必要なのではないかなというふうに思います。

海外の方が増えているというところに関しましても、フェイスブックなどで写真をアップされたものを見つけた海外の方が、その写真一つで北海道にやってきて、その土地の方に、この写真の場所に行きたいんだというような形で、どこかもわからない道の景色を見せて、行きたいというふうに来られる方がいるというお話を伺ったのですけれども、そ

ういったところもありまして、観光地ではないところですか、普段観光で行くような整備がされていない場所といいますか、そういった1次産業の現場、牛がいるところですか、畑ですか、そういったところも含めて、景観として美しく保てるような何かやり方が必要ではないかなと思います。

具体的なところで少し挙げますと、よく弊社の編集部の方で挙げますが、風除けのフェンスで景色が見えないですとか、そういったところが多かったりですとか、あとは道中にある公共のトイレですとか、そういったところをきれいに保つということですとか、本当に細かなことなのですけれども、ちょっとしたことで訪れた際の印象がよくなるか、悪くなるかというのは、本当に些細なことだと思うので、そういった配慮というか、道を求めている方も多いいということで、少しそういった部分も考えていけたらいいのかなというふうに思います。

最後に、お願いというところなのですけれども、私ども本、書籍ですね、紙の印刷物ですとか、ウェブ、動画という発信ツールを色々持っているのですけれども、道内にはそういった、例えばデザインだったりですとか、ムービーですとか、そういったものに長けている方々も沢山いらっしゃるの、そういった方々と情報を発信する方をつなげるとい、組み合わせで発信していくようなことがもっとやれたらいいのかなというふうに思います。いいものがあるのですけれども、発信力を持っていないというところにうまく一緒に協力してやっていけるような、そういった横のつながりが強いというのも北海道の良さかなというふうに私どもは考えておりますので、そういった発信力を活かしていけるような仕組みづくりも、何か考えていただけたらありがたいなというふうに思います。

以上です。

○中嶋氏 ありがとうございます。

それでは、近江様お願いいたします。

○近江氏 概要の説明、本当にありがとうございました。

新たな北海道総合開発計画の中間整理の概要ということで、本当に御丁寧に御説明いただいたので、十分理解させていただきましたし、改めて北海道の価値みたいなものを学ばせていただきました。

私からは、そもそもの部分で感じたところを、更に皆さんの御意見を伺う中で、私自身本当に一番無知だと思うのですけれども、本当に感じたことを率直に話させていただきたいというふうに思います。

この北海道総合開発計画という言葉聞いたときに、北海道が作る計画ではないのですよね。国が作る計画だということ、先程の北海道開発法、国の時々々の課題を解決するために北海道に役割があると。それを法律として定めているということ自体、どれだけの道民の方たちが御存じなのかというふうに、まず率直に思いました。恐らくこの北海道総合開発計画という言葉だけを目にした時に、これは北海道が作ったものではないかなとい

うふうに感じられる方もきっと多いのではないかなと思いましたし、逆に国がそこまで北海道総合開発計画というものを作る、ある意味国税を使って北海道開発を行うということですから、すごいことなのだなということを改めて思いました。

その中で、時々国の課題を解決するという大きなミッションが、国税を使われるということの代わりに、北海道には課せられているということなのかなというふうに十分認識したわけですが、その強みという部分で、先程の御説明の中でも、私も少し携わらせていただいていますけれども、農林漁業、まさしく命の糧、食を育む産業が北海道の大きな基盤であるというところが大きな強みである。それは本当にそのとおりだなというふうに思うわけですが、先ほど私の活動の中で、なかなか大事だけれども、人口が多くいる、例えば私のふるさと東京だったり、大阪だったり、名古屋だったり、そういう所の人たちが、どこまでこの農業とかを大事というふうに思っているのかなということに対しては、非常に疑問を持っております。

今、全ての就労者人口における農業者の割合はたったの4%というふうに言われています。私、45歳ですが、45年前は20%ありました。私の父さん世代が生きていた時の75年前は50%ありました。2人に1人は農業に従事していた時代にはきっと農業が大事という当たり前のことが当たり前に伝わっていたと思うのですが、4%になってきて、都市一極集中してきている中で、なかなか当たり前のことが伝わりづらくなってきている中で、本当にこれは正論だと思います。誰がどう考えても北海道の価値は農業だし、農業の強みという部分は誰も疑いがないのですが、国民がどんなような形の意識を今持っているのかということを考えたときに、本当に戦略ということを考えた時に、正論を通していくことだけでいいのかなということを率直に感じた次第です。

そんな中、資料を一部使わせていただきたいと思いますので、御提示させていただいた「農村ホームステイのすすめ」ということで、こちら農協さん、JAグループさん、私もお世話なっております、作っていただいたものですが、2ページ目をちょっとご覧ください。

こちらの資料は、学校の先生たちに配付するために作ったのですが、冒頭に書いております大きな社会問題である不登校・引きこもり・ニートの原因は、自立意欲を欠落させる生活習慣の乱れ、希薄な対人関係、直接体験の不足にあると言われております。本当に私が住んでいる浦幌もどんどん都市化していく中で、決して都市部だけの子供たちを取り巻く問題ではないと思います。ただ、間違いなく50年前、人口の半分が農業者だった時代には、こういうようなニート・引きこもり・不登校ということは、そんなにあったわけではないというふうに思います。農村と関係性が希薄になる中で、本当に国の存続を揺るがすようなこういう子供たちを取り巻く問題の原因がこの生活習慣の乱れ、希薄な対人関係、体験の不足と言われております。

これら三つを見たときに、規則正しい生活、食生活、濃い人間関係、体験が豊富というのは、当たり前のように農業者の方たちが日々の生活の中で得られていること。先程

たった1泊ですけれども、十勝で行われているホームステイという話をしました。そこでは、国が大きな課題として上げている子供たちを取り巻く課題解決が実は農村には備わっているというふうにも捉えられると思います。こういう子供たちの未来、まさしく国の持続を考えたときに欠かすことができない、でもこれらをなかなか都市部で解決しようといっても効果的な方策が見つからないという中で、農村で生活を一緒にするだけで、これの解決に向けた糸口が見つかり始めているというのももう一方で事実なのかなと思います。

安保法制の関係で若干先延ばしになってしまったというふうに認識しておりますけれども、国の方も子ども農山漁村交流プロジェクトという部分で120万人の小学5年生を一定期間農村で生活体験をさせるということで、これらの子供を取り巻く問題を解決しようということを法案化に向けて進もうという超党派での動きがあるというふうにも伺っております。その大きな受け皿として、例えば北海道の価値という部分で何か狼煙を上げるといって、先ほどの農業、食というものももちろん大事です、理解しなければならない部分ですけれども、なかなか産業という言葉が表に出てしまいますと誤解を招いてしまうということもあります。

ただ、教育という部分が前面に出た時に、それを反対する人がどれだけいるだろうかというふうにも思います。戦略ということを考えたときに、子供の教育に国が抱えている課題解決に向けた大きな糸口が農村にあって、その価値が北海道にあるというような見せ方もこれからは必要なのかなというふうに感じたところです。

あと、思ったところ、もう1点なのですけれども、地域活性化という部分、先程の概要の説明の中にもございました。きちっと目標を掲げられているのですけれども、伺っていて若干気になったのが、観光産業振興、お金を増やそう、人を増やそうということは決して目的ではなくて、あくまでも手段だなというふうにも思う中で、人を増やして、お金を増やして、どういう北海道にしていくのだ、それが国の課題解決に向けた役割を担っていくのだということをもっと明確に、それを何か専門家の方がわかるということではなくて、次の世代、子供たちにも理解できるような形で何か指標を作っていただけると、どうなのかなというふうに個人的に思いました。

すみません、無知な中で、感じたことをしゃべらせていただきました。

以上です。

○中嶋氏 ありがとうございます。

大変様々な視点から重要な御指摘をいただきました。この後、総合的に皆さんとお話をしたいと思いますが、ここで委員であられる神田先生から、皆さんからの御意見を受けてコメントをいただければというふうに思っております。

○神田氏 色々な御意見ありがとうございます。

まず、率直に感じたのは、こちらへ来て皆さんの現場を通しての生の声というのがひしひしと伝わったというふうにまず思います。今まで、資料にもありますように、審議会に

おける分科会を5回会議を行ってきました。その会議の席上では、色々な資料を基に説明いただいて、そして肉づけができて、現在はこの中間整理という段階にまで来たわけです。この中間整理は、コンパクトに非常によくまとまっており、結構網羅されているなど感じました。内容は、現状と課題、それを具体的に今後どう持っていくのかということのポイントとして書いてあるわけですが、ちょっと具体性に欠けるなというのを、私だけではなく、皆さんも感じていたと思うわけです。

ところが、この戦略は、具体的にどういうふうにやっていくのだという基本方針が弱いのではないかと感じたことと思います。しかし、非常に良かったのは、本日このパートナーシップ、最後ということなのですから、皆様の御意見により、中間整理の段階においてあいまいだった部分に魂が入ったのかなと思います。すなわち、もうちょっと具体性がないとか、それから切実な問題として、これはちょっとフラット的な表現ですから、どこに力点を置くのかと感ずる部分がありました。特に北海道というこの地域において、北海道の特性も当然あるわけですが、先ほど近江様からも御指摘がありましたように、次世代を担う子供たちにも理解してもらわなければ、実現に結びつかないわけで、10年、20年先の目標計画ではなくて、もっともっと長いもので持続性を持たせるという前提からいきますと、今日の各委員のお話の一つ一つが胸にしみてくるなというふうに感じたわけです。

非常にラフなわけですが、参考2の資料でロードマップがあるわけですが、ちょっとこのロードマップではラフかなと感ずるわけです。幸いに、今日の会議において皆様の御指摘がありましたので、是非事務局の方で、もう少しロードマップに肉づけをお願いしたい。今日の皆さんの色々な発言の中で、具体的な話がありました。その具体的な、例的なものは、やっぱり入れていくべきではないかなと思います。

実は、この会議に参加する前、午前中見学させてもらったのですが、鹿追の町長さんにバイオマスのプラントの説明をいただきました。そして今日の会議でも、マンゴーを生産する中において、エネルギーを有効活用するという循環型の具体例がありました。日本では実験プラン段階で終わってしまうという例が全国で結構多いのですが、この地域においては、それを継続し実現している。更には、拡大していこうという、色々なお話も聞くことができました。

今、しないと、次の世代に、どういう世の中になっていく、またどういうふうにしないと人口減云々というのは、それは結果論であります。具体的にこの地域にというか、帯広だけではなくて北海道に、みんなが移住したいなと現実と思う、そのためにも、こういう具体的な話がその地域で続くのではなくて拡大すると、広がっていくことが重要です。その起点となるのがこの地域の色々な今日のお話でありまして、元気あるプロジェクトが沢山あるなというふうに感じたわけです。

そういう具体的なことを何かもう少しこのロードマップ等にも含めていただければ、さっき指摘していただきましたように、次世代の人たちも理解し、そして更に次へとつな

げ結びつくのではないかなと思った次第です。本日は中間ですので、これから最終的な結論というか、方向性が出てくると思います。そういう意味では非常にいいタイミングでの会議ではなかったかなと感じた次第です。

以上です。

○中嶋氏 ありがとうございます。

それでは、私もごく短くコメントと申しましょうか、お話を伺った印象を述べさせていただきます。

この計画づくりというのは、どうしても東京にいてやるものですから、なかなかその現場感覚というのがあるようで無いようでというところで、ややもどかしい思いを私自身もしておりましたが、今回こちらに来て、現場も同じく見させていただいた上で、具体的なお話を伺って、可能性というものが非常にあるのだということを強く感じました。どういう課題があるのかということも、もちろん役所の方で色々な資料を出していただきましたが、それに対する課題解決の取組と合わせて伺うと、より一層迫力があって、そしてそれが実に難しい問題であるかということも分かりましたけれども、ただ取組を始められて、それに対しての一つの解答を出していただいているということに力強い思いをいたしました。

それから、皆さんのお話を伺っていて、やはり大事なものは人であるというふうに思います。そういう意味では、今回の中間整理で、パートナーシップ活動をする、そしていかに皆さんに関わっていただくかということを考えていくということが、計画を進める上でも重要なのだということがとてもよく分かった次第でございます。

それからもう一つ感じましたのは、地域内の方々が一生懸命汗をかき、様々なアイディアを出しながらその解決に向けて進むと同時に、地域の外の方々といかに関係を結んでいくのかということに腐心しているということもよく分かりました。正にそういう時代なのだ。交流や対流や、お互いがコミュニケーションをとる中で何か触発されて作り上げられていくものというのがあるのであって、やはり地域内だけで完結して何か取組をするというものではないということも、全体を通して感じた次第でございます。

ちょっとまとまっておりませんが、まず私の印象を申し上げました。

それで、議事といたしまして、この後、意見交換ということなのでございますけれども、例えば先程の中川さんが、実は行政に対してもっと沢山言いたいことがあるのだけれども、このぐらいで収めますという感じの印象を持ちました。まだお時間がございますので、是非言い残したことがあれば、まずそれを話していただいて、気づいたことなどを追加していただければと思います。これは他の皆さんについても、お願いしたいと思うのですが、急に振って申し訳ありませんが、いかがでございましょうか。

○中川氏 昨年11月か12月初めだったか、ちょっと忘れたのですが、地方創生の所管大臣が、私どもが知らないところで、正にこのマンゴー事業が地域創生のモデル事業だということで色々な所でお話をされているということで、僕らは今、色々な部分で

ちょっと困っていた部分があつて、何とか、もしかしたらという可能性で言ったのですけれども、先ほど話をした中で、結局、地方創生で、そうやってモデル事業だと言っていたから、何か僕らに当てはまるメニューがあるのかなと思ったら全く無くて、結局、政治家のリップサービスで終わっているというような、リップサービスなのかどうか分からないのですけれども、我々にリップサービスをしてもしようがないので、わかりやすい事業だということ saying していたのでしょうけれども、我々としても探している中でそういうことを言われれば、可能性はあるかなと思ってしまうのですけれども、そういう部分というのが銀行もそうなのですから、最近銀行も変わってきましたけれども、結局今新たな新しい事業をやろうと思った時に、失敗するか失敗しないか、失敗しないで成功するところばかりに何かいつてしまっていて、新たにやろうとしているということが、これがやっぱり一番大事なことで、そこにどう金融機関も、国も、道も、行政がやってくれるかと。

そこで僕らのやっていることは、結局、私事ではなくて、地域に対してのという部分で、今の地元の行政にも分かっていたいて、そういう部分ではすごく協力的なのですから、そういうものがなかなか僕らにとっては歯がゆくて、自分らのためというか、自分らの町のために、地域のためにということで考えています。

言い忘れていたのですが、今のお話とちょっと外れてしまうのですけれども、一つだけお話をしておきたいのですけれども、12月に作るということはすごくいいことばかりで、農薬を宮崎から比べると5分の1ぐらいの量しか使わないで済むわけです。今、外はもう寒くなってきて、ほとんど害虫もいなくなって、そしてカビだとかというのもほとんどなくて、そういうものも農薬を使わないということで、非常に安心・安全なものがつくれるということで、これは北海道の強みだなというふうに、価値だなというふうに思っています。ちょっとこの辺をお話するのを忘れたので、お話ししたのですけれども。

そういう部分で、行政というのはどういう立ち位置なのか、色々私のところに、農林水産省とか、色々な方が視察に来られて、いい事業ですね、いい事業ですねと言ってくれる割には何もないというのが今の現状で、本当に苦しくて苦しくて、何でこんなに自分らが苦しみながら、うちの家族を苦しめながらやっているのに、というように感じて、何のために行政はいるのかなというところを最近思っ、かなり私も不思議に思いながら頑張っています。

○中嶋氏 外に発信することで、何かお問い合わせみたいなものはありませんか。それこそ投資関係のお話とかですね。

○中川氏 あります。投資関係だとか、色々あるのですけれども、ある銀行の方から出資をして一緒にやりたいというお話も来たのですけれども、結局、出資してもらっても、あとは足りない分を借金で借りなければいけないとかという部分があるので、結局最終的に自分らが辛くなってしまうので、余り甘い話には乗らないということを決めて、いい話のように見えていて、結局は何もないというのが今の現状なのかなというふうに思います。

○中嶋氏 ありがとうございます。

他に、追加して御発言いただけるようなことはございますか。

そうしましたら、もう少し中間整理の項目についての御意見もいただければと思います。分厚い方の資料はなかなか見ることはできませんので、やはりこの資料2-1の概要版の4ページのポンチ絵を見ながら御意見をいただきたいと思うのですけれども、順番が後先になるかもしれませんが、まず世界に目を向けた産業の振興というあたり、農林水産業・食関連産業の振興や世界水準の観光地の形成、それから地域の強みを活かした産業の育成といったあたり、これについては、榊さんや中川さんは実践的に取り組まれているということなのですから、今後何か取り組んでいくに当たって、こんな観点も入れてみたらいいのではないかなというような、何かアイディアみたいなものがあれば大変ありがたいと思います。先程の行政の役割ということについては、中川さんから今御指摘もありましたけれども、実際に例えば榊さんは、十勝中札内ファーム街道委員会に組み込まれ、それから先程の自転車のイベントなんかも仕立て上げていらっしゃるわけですが、その中でこういうことが課題としてあって、進めていく上で何か克服すべきこういうことがあるのだというようなことが、何か実体験に基づいたことでも結構でございますけれども。

○榊氏 自転車の部分でお話しさせていただきますと、第3回を今年7月12日にやっているのですが、まずうちの前の道路の話をして申し訳ないのですが、道路ががたがたです。それで、道路事情が悪いという中で、やはりロードバイクで走るということもありまして、肉厚、空気がすごく薄いというか、振動が感じやすい乗り物なものですから、道路にちょっと穴があいていたりしていると、怪我につながっていくということで、怪我をすると、一歩間違えれば大事故が起きる場合もあります。今は、警察もそういう部分に関してはすごくシビアになっておりまして、そういう事故が起きると、次年度開催ができないという、そういうことにもつながっていく場合があります。そういった意味を考えた場合には、道路の整備というのは、もし進むのであればお願いしたいところであります。

また、景観というところがとても重要になってきます。もちろん農村景観を見ながら走る、楽しんでいただく。外国で言えば、ヨーロッパを走っているような、あんなイメージの中で自転車に乗っていただくということになります。ただ、緑だけだとか、そういうことであれば面白みがありません。今、国の方でも進めています多面的機能という言葉があるかと思います。例えば、それを農業生産者側に景観という部分を少し考えられるようなことがあれば、もっと色として見せていくことができるかと思います。それというのは、緑化というものと緑被というものによって変わっていきますので、そういうことも加味しながら考えるということも必要になってくるのかなというふうに思っております。

○中嶋氏 ちょっと質問ですが、資料に書いてあるのかもしれませんが、その自転車のイベントは季節としてはいつぐらいですか。

○榊氏 今は7月12日ということで、これは私が提案させていただいたのですけれど

も、農業事情としては、どうしてもトラクターが動く時期に、こういうイベントをするというのは慎重にやらなくてはなりません。私はどういふことで意見を述べさせていただいたかという、更別でトラクターBAMBAという大きなイベントがあります。あえてその日にぶつけさせていただいております。それはなぜかという、農業者はそこにみんな集まるのです。だからトラクターが動かないのです。動かないということは、道路事情も走る人にとっていい環境にあります。そういったことを是非やってもらわないと、このイベントはもしかしたら1回で無くなるかもしれませんので、そこは気をつけてやらなければならないということで、その日にさせていただいているという経緯があります。

○中嶋氏 今、景観のお話がありましたが、片山さんもちょっと別な視点からの、別の場面での景観への指摘があったのですけれども、何か追加してお話しいただくことはございますか。

○片山氏 景色のことで述べさせていただいたのですけれども、その景色があるというのは、やはり農家さんだったりですとか、そういった畑の景色を作ってくださる方々というか、そういった産業があつてのことなので、もちろん風景だけをよくしていくというようなことではなく、産業として守っていく、育てていくというようなことももちろん必要かなと思ひまして、先ほどちょっとそこまでは申し上げなかったもので、追加させていただきます。

○中嶋氏 ありがとうございます。

そのような普段気づかないような景観もあるし、それから人々が集まった時に集中して見られる景観というのもあるわけですね。そこら辺のメリハリのつけ方というのはなかなか難しいように思うのですけれども、農業をやっているらっしゃっているかがでしょうか、そこら辺は。全て押しなべてきれいにするというのはなかなか難しいという気はいたしますけれども。

○中川氏 十勝の景観というのは、今お話があつたように、農家の方とか、住んでいる方達が作った景観であつて、正に自然だと思ふのです。私も色々まちづくりを考える前までは、何も無いというふうに使っていたのですけれども、実は何も無いのではなくて、こんなに沢山あるというふうに使ふのです。防風林一つにしても、真っ直ぐな道路にしても、そこにある緑が全部景観というのは、我々は毎日見ているので一つの観光地ではないというふうに使ってしまうのですけれども、実は本州の方達は、それが、何も無いのが本当の良さだというふうに使ひらっしゃると私は思ふので、特に何かをして作り上げるのではなくて、このままの十勝が本当の観光資源だというふうには思ひます。ですから、特に今の景観をいじるのではなくて、今の景観が最高の観光の資源だというふうには僕は思ひます。

○中嶋氏 それをしていくためには、いい農業が行われていて、持続的にそして皆さん生き活きとして農業をやっていることが自然とそういうものにつながってくるということなのではなかうかね。ありがとうございます。

それでは、同じこのページの北海道の価値創造力の強化の部分で、交流・協働を促進し、活動人口を確保するというあたり、これもとても大事なことで、この中で特に価値創造パートナーシップ活動の展開というのを考えていきたいというふうに思っております。

その中で、近江さんの方から、外の方に来ていただく、特に若い人に来ていただいて、農業のことをよく知っていただくという活動をしていただいているわけなのですが、それも含めて、ここの部分について何かもう少し御提案なり、御意見なりがあればと思うのですが、いかがでございましょうか。

○近江氏 先ほど十勝で行っている大阪とか東京の修学旅行生という部分は、どちらかというと観光というよりは、教育的な観点からという位置づけが大きいのかなと思います。ただ、結果として、例えば修学旅行、大体飛行機代を除いて、十勝で3泊4日するわけですから、1泊が農家さんで泊まるという部分で十勝を選んでいただいて、その他の2泊は大体十勝川温泉だったり、十勝の観光ホテルに泊まるのですが、そういう経済波及効果だけ考えても大体2億円ぐらいはこの事業だけであるのです。ただ、それを余り数字で言ってしまうと、それが目的になってしまいがちなので、余り大きくは打ち出さないのですけども、今やっている事業もそれだけの経済波及効果はあるのかなという認識です。

その活動が、我々は高校生に対して十勝のファンになってもらう、十勝の農業を理解してもらう、身近に感じてもらうという部分での活動なのですが、結局、その子たちが今度、例えば大阪の子であれば、大阪に戻った後に、今は更にその関係性だったり、まずは身近に感じた農業や十勝のこと、更に掘り下げて考えてもらおうというような、学校と協力した事後学習というのを展開しています。

今後は、大学生になってインターンみたいな形で十勝に来ていただくようなことも想定しているのですけれども、きっと今のこの活動を延長していくと、既に出始めていますけれども、例えば、畜大に入ろうと思ったとか、網走の農業系、札幌の農業系の大学に入ろうと思ったとか、進路につながるような子供たちも出てきています。それは、まだまだ若い活動ですから、結果としては出ていないのですけれども、きっと大人になってから、自分で稼ぐようになってから、今度観光で来たいという子供たちの意識もきっと出てくるだろうなど。そうすると、今は我々としては別に観光的にやっていないのですけれども、この事業を10年、20年続けていくことで、結果としてすごいコアなファンというか、十勝に対してリピート意識を持つファンができてくるのではないかなというふうに認識しています。

もちろん、今やる観光という切り口もあると思うのですけれども、我々がこれからもやっていきたいと思うのは、結果として十勝に何度も来ていただけるような、十勝を理解してくれる、北海道を理解してくれるファンを、教育という部分の入り口から連携していきながら作っていききたいなというふうに思っているところです。

○中嶋氏 さっき正保先生から地元愛の話がございましたけれども、今のお話は道外の方

へよく知っていただくということなのですが、道内、域内、十勝の中の子供たちへの教育ということももちろんやっていらっしゃいますよね。そこら辺、先程の発言を受けて何か考えるところがあれば。

○近江氏 今日、大阪とか東京都か、北海道外の子供たちに対してという話をさせていただきましたけれども、もう一方で、今日は全然触れなかったのですが、私が住んでいる浦幌町というところで、浦幌スタイル教育というふうに名づけているのですが、地域にいる子供たちに地域の愛着を育んでもらうという学校教育、浦幌は高校がなくなってしまうので、地域での教育は小学校・中学校の義務教育の9年間でしかないのですけれども、この事業は、子供たちに対して学校教育の中で、学校の教育ですから全ての子供たちが自動的に受けることになります。地域にある当たり前の資源と向き合う中で、地域に魅力を感じ、地域に自信と誇りを持つ、地域にまた帰ってくるというようなことが、7年たった取組なのですからけれども、大分見えてきました。

本当にこれがきっかけかどうかは微妙なのですからけれども、子供たちに対して優しいまちづくりみたいなことが、昨年度発表された出生率では、十勝では浦幌が一番なのです。それは、北海道庁の方ですからけれども、他になかなか理由が見当たらないということで、この浦幌スタイルの活動、子供たちに対して愛着を育む、子供たちに対するそういうまちづくりだったり、教育をしているということに対する安心感が、何かお母さんたちにもう一人というところを促しているのではないかという分析で、先ほど中川さんの方からの地方創生の部分で、3月1日に担当の補佐官が来られたと思いますけれども、翌日は浦幌の方に来ていただいて、その浦幌スタイルの活動を見て帰られたという部分で、地方創生という観点からも、何か本当に地味で一つも派手ではないのですけれども、地域の子供たちに対する学校教育から始まる取組の中で、間違いなく子供たちが地域に主体的に残りたいという意識が育ってきているというふうな活動で、ちょっと注目をされているのかなと。そういうところにも関わらせていただいております。

○中嶋氏 今のお話の中で、お母さんの意識も変わってきたということは、お子さんの教育をすることによって、世代を超えて、特に30代、40代ぐらいの方でしょうか、その方達にもかなり強い影響を与えている、その可能性があるというふうに理解してよろしいですか。

○近江氏 そうですね。私も本当に中川さん程ではないですが、今ずっとPTAだったり、まちづくりみたいなところに関わる中で、同世代だったり、上の世代の大人の人たちと一緒にやってきたのですけれども、なかなか私も含めて大人は変わらないというか、できないということを軸にして物事を考えてしまうので、なかなか変わり切れないなというところを、子供は本当にストレートなのですよ。何かしがらみとかそういうのを背負っているわけではなく、純粋に、地域が元気になるためにと考える。例えば子供たちのアイディアには、大人には無い何か純粋な、でも本質をついているようなものがありますし、子供たちが変わるということはそんなに難しくない。

意識をして学校教育の中でという部分で、子供たちが地域に愛着を持つということを見ると、変な言い方なのですが、大人は変わらざるを得ない環境に追い込まれるというか、子供たちがいいと言うのに、地域の大人がそんなもの何てことないだろうみたいなことにはならないのですよね。だから、私たちはこの活動を見て、大人はなかなか変わらないけれども、子供が変わるのを見ると、情けない話なのですが、親も変わるし、地域も変わるのだなということを、この何年間、目の当たりにさせていただいています。

○中嶋氏 正保先生は、短大の学生さんを教育していただいて、もう一つ上の世代といいたいでしょうか、そこの教育に携わっていただいています。それから、そもそもこれは地元愛のお話ということで、先生から口火を切っていただいたのですが、何かつけ加えてお話ししていただけることがあれば、他のことでも結構なのですが、いかがでしょうか。

○正保氏 今の子供の意見が純粋だということは、短大生と関わっていても思うところなのですね。やっぱりしがらみがないというか。ただ、ちょっと気になるのが、自分たちが発信する役割を持っているということに気づいていないというか、それを聞いた時に、大人がどう反応するかというところなのかなと思うのですが、そういう意見が貴重なのだというところをもっと子供たちだったり、短大生がそういうふうに感じると、もっともっと自分たちは求められているというところで発信できる力になっていくのかなというのは感じたりする場面が結構あります。

自分の意見を言うことをあえて止めてしまっているような、そういったことが、今の小さな子供たちだったりとか、短大生にもあるのかなとちょっと気づくのですね。みんなが同じことがいいとか、自分だけが目立つのが嫌とか、言ったことに何かマイナスの反応をされるのが嫌とかというところで、本当は色々な意見を持っているのかなと思うのですが、出し切れていないというか、能力を発揮できていないような、そういった世代なのかな、時代なのかなというふうにちょっと感じたりします。

ちょっと離れるかもしれないですが、実習でよく施設にお世話になるのですが、消極的だねというふうにどうしても言われてしまうような、そういった学生が、まだそういうふうにしただけで育ってこれないというか、それをどう変えていくかというところで、自分たちも課題を持って今やっているところではあります。

○中嶋氏 ありがとうございます。

片山さんのお話を伺っていると、かなり若い方がここに大きく関わっているのではないかというふう思うのですが、今のお話で、発信力に気づいていないという一方で、SNSなどを使って発信をする若い方達もいらっしゃると思うのですが、そこら辺の現状をどういうふうに見ていらっしゃるかということと、そういう方達と一緒にどんなことができるか。もう既に取り組んでいらっしゃいますけれども、何かご意見があればお願いします。

○片山氏 正直、最近というか、ここ数年でSNSがかなり普及してきたことも影響しているかは分からないのですが、書籍というか、紙の媒体よりも強大な発信力を持つ

ているなというのは感じるころであって、その発信する層というのがちょっと雑誌媒体とSNSでは違ってくるのかなというふうに思っております。

弊社で作っている「スロウ」は、40代以上ぐらいの方が多く読んでいただいているというデータがありまして、結構年齢層が高目、30代後半から40代以上で、60代、70代という方々にも読んでいただいているのですけれども、SNSとなると、もっと若い10代、20代の世代もかなり今は皆さん使っていっぱいするので、その幅広い層に発信していくべき情報というのは、やはりそういったネットを使っていかなければいけないなというのは思っています。

先ほど自己紹介の際に少し触れさせていただいた台湾版のDVD付きの冊子があるのですけれども、これはワイガヤ十勝さんというところと共同で出版させていただいたものなのですけれども、台湾の出版社に勤めている女の子が十勝に遊びに来るという設定の映画でして、ショートムービーなのですけれども、それはもう初めからYouTubeで発信するということを決めて作っておりまして、無料で見られるようにしているのですけれども、そういったものも反響がかなり大きくて、全世界で見られるというところは非常に大きいなと思ったので、私ども余り正直やってきていなかった分野というか、映像部門自体ができて新しいもので、これからもっとやっていく必要があるなというのは、その反響を見て反省というか、決意を新たにというか、そういった必要性というのは非常に感じました。

○中嶋氏 今のお話は、国内だけではなくて、海外の人の目線とか、意見というののもかなり気をつけなければいけないということでもあるわけですね。

それから、若い人のお話に焦点を当てたのですが、やはり高齢社会でもあるし、高齢者の方、高齢者までいかないにしても、シニアの方たちへの情報発信とか、またその人たちの意見の吸い上げなんかについては、片山さんたちは何か考えていらっしゃることはありますか。

○片山氏 高齢者の方々向けにということで特別専門に何かやっているということは、今のところはないのですけれども、やはり「スロウ」の雑誌の読者層が割と年齢層が高目でもあり、リタイヤ、定年退職されて北海道に移住してくる方々ですとか、そういった憧れを持っていらっしゃる方々とかが多いので、通信販売付きと申し上げましたけれども、そういった注文もハガキですとか、直筆のメッセージを沢山書いていただくような方々が多いので、そういったアナログの部分の止めないというか、そういったところを続けていくというところが、私たちがやっている中でも特に反響があって続けているというところではあります。

後は、実際に会社の方に来ていただく方とかもいらっちゃって、北海道が好きで、本を読んで編集部遊びに来ましたというような方々ですと、やはり60代以上の方で足を運んでくださる方がいらっしゃるので、行動力のある方々が多い世代だなというのはすごく私たちも感じておりますので、引き続きそういった細かな対応をやっていききたいなと思

ます。

○中嶋氏 ありがとうございます。

先ほど、正保先生、高齢者の方をどういうふうに捉えていくべきか、介護を受けなければいけない方もいらっしゃるけれども、動ける方もいらっしゃるというお話で、現場をよく御存じだと思うのですけれども、高齢者の方の役割みたいなものを、それから期待みたいなものがあれば、お話しいただければと思いますけれども。

○正保氏 多分、前期高齢者の方達は現場から離れてまだ間もない中で、そこでやってきたことを次世代につなげていきたいというような思いが強い方が多いなと、そういったことで何か役割を持てるのではないかと思っている方の層と、逆に、それはもう一段落したから自分の人生を楽しむといったところに二分しているような傾向があるかなというふうには感じています。

○中嶋氏 様々な役割を、計画を進めていく上で果たしていただきたいと思うのですが、それは若い方でもあり、高齢者の方でもあり、その方達とどんなふうにならなってやっていけばいいでしょうか。5ページ目あたりで、重層的なプラットフォームづくりというのがあって、それぞれ課題がありまして、そこで活動の取組をしていかなければいけないのですけれども、どういうふうにすれば皆さんに参画していただけるか、高齢者の方にも参画していただけるか、若い人にも参画していただけるか、それからそれが農業者の方にと、それ以外の産業の方に、色々課題があると思うのですけれども、急に振って申し訳ないですが、中川さんいかがでしょうか。組織づくりという意味合いで、高齢者の方についてでも結構ですし、農業者の方でも結構なのですが。

ちょっと考えておいていただけますか。急に振ってしまったので申しわけありません。

では、近江さんに。農家で子供たちに民泊していただくわけなのですが、それを受け入れる方々というのはどんなふうな思いでやっていらっしゃるかな。先程の人材づくりもそうですし、それから交流・協働というものを正に実現しているフロントの方々なのではないかなと思うのですけれども。

○近江氏 本当に全部で19市町村で500戸以上の方達に取り組まれているので、正直一人一人違う思いでやられているのかなとは思っているのですけれども、ただやっぱり先程もちょっと触れたように、今この時代において、もちろん国、行政だったり、色々な組織団体だったりというところで、農業の大切さだったりということを役割として発信していただくということは当然求めていきたいと思ひますし、お願いしたいところなのですから、それを国や組織だけではなくて、自分たちでもその一端を担っていくべきだろうという意識を恐らく多くの方達が持たれているのではないかなと。TPPとか、色々な農業情勢、農村情勢が変わってきている中で、特にそういう必要性みたいなものをもしかしたら感じられているのではないかなとは、何となく感じているところです。

○中嶋氏 そういう形で参画できるわけですね。その色々な問題を解決する……。

○近江氏 そうですね。ですから、本当に5年間でゼロから500戸ぐらいに広がってき

たのですけれども、そう考えると、先程の質問にも関わってくるような気がするのですけれども、自分事として捉えられているというところが、何か新たな取組に関わるということに対して、もしかしたら必要枠というか、そういうことがやらされている感ではなくて、自分として必要だというふうに思えるか思えないかということが、何か人が関わっていくためにはマストなのかなというふうに思います。

○中嶋氏 ありがとうございます。

それでは、あと10分ぐらいになりましたので、最後にそれぞれの御意見、追加していただけるものがあれば、それから全体を通してお気づきの点があればお話したいのですが、もし可能であれば、先程のプラットフォームの部分で、どういうふうにこれを作りあげて、そして皆さんにこれを進めていただくような仕組みにすればいいのかというあたりをつけ加えていただければありがたいなというふうに思っております。

恐縮ですが、中川さんから順番によろしく願いいたします。

○中川氏 今の質問に合うかどうかかわからないのですが、現状の日本全体の中で見ていくと、全部中央に牛耳られているというか、全国色々な所に行っているのですけれども、今までは何々商店だとか、そういうところがあって、その地域の特徴ある雑貨屋さんがあったりとか。今は、全国チェーンのコンビニなど、もうほとんど景観が変わらない、北海道だろうと、北海道には北海道人が大好きな地元のコンビニがありますけれども、そういう部分ぐらいで、ほとんどどこに行っても全国チェーンの大型スーパーがあったりとか、地元のそういう地域を発信できるようなものが無くなってきて、結局それは一つの中央にある巨大な組織が全国を牛耳っているというようにしか私は見えないのですね。

そういう部分で、食だとか、色々なものを考えた時に、やっぱり北海道らしいというものを何か形成していかないと、日本らしいというか、日本の地域地域が一つ一つの顔というものが今無くなってしまった、無くなっていくではなくて、もう無くなってしまったというふうに私は思うのですね。ですから、その辺の北海道の十勝なら十勝の役割の顔、地域地域の場所、その顔をもう一回ちょっと考えなければ、地域らしい、あそこらしいというふうになっていかない。ましてや北海道の場合は歴史が浅いですから、本州に行くと色々なお城だとか、色々な歴史的な部分が沢山ありますけれども、北海道にはありませんので、そういう一つの北海道らしい顔、それは農業であり、そういうものをもっと充実した顔にしていくという方向に向けていくべきではないかなというふうに思います。

○中嶋氏 ありがとうございます。

それでは、正保先生お願いします。

○正保氏 プラットフォームのことに結びつくかどうかかわからないのですが、先ほど中間整理の中で、フロンティア精神に触れられている部分というのは沢山あったのですが、実はそれを読んで、自分自身もはっと気づくようなそういった内容で、それというのはもっと若い世代の人たちは、自分たちがそういう位置づけであるということに気

づいていないのではないかなと思ったりするのです。

それで、先程も地元愛の話をしましたがけれども、そういうことにも気づいていない人達も沢山いるのかなというか、自分たちの生活の場は当たり前で生活の場として成り立っていると、そこへの魅力というのはやっぱり気づきにくいのかなというところで、それであえて外部の方だとか、もしくは国の計画ではとか、道の動きではといったところが、もし感じ取れるようなそういう機会があれば、改めて、そうなのだと気づけるようなそういった機会になるのかなと思いますので、この重層的なというところでは、そういった意味も含めて何かあるといいのかなというふうになんか感じたりもしました。

○中嶋氏 ありがとうございます。

それでは、榊さんお願いいたします。

○榊氏 私からは、食という一つの形の中で、一つずつ成果を上げていけるようなそういう取組をしていきたいということで、まずは自転車という一つの動きを形にしたいなと思っております。それが、次にどういう形に動いていくかということを地域の近隣も含めて、徐々に徐々に発展していく。それが最終的に地域全体に広がることになっていけば、それをみんなで取り組んでいく。そういうのがこれからプラットフォームという中で大きく位置づけられていくのかなというふうに思っております。

○中嶋氏 ありがとうございます。

それでは、片山さんお願いします。

○片山氏 先ほど中川さんがおっしゃっていましたが、地方発信の魅力的なものが無くなっているという話がありましたけれども、そこに関して、私達はそういった地方の小さな魅力といったものを拾い上げるような仕事をしておりますので、そういったまだ残されている小さな魅力ですとか、地元の方々が気づかないようなものというのを外からの視点も入れつつ活かしていけるような、そういった小さなものを消してしまわないようなやり方というのが必要かなと思ってまして、私たちもちろん情報発信する立場として地方の町でやっておりますので、そういったところを心がけていかななくてはならないのですけれども、改めてそういったものを感じました。

あと、私事というか、個人的な事になってしまうのですが、今の景観自体が最大の観光だという話、それも中川さんがおっしゃっていましたが、50年前に祖母が植えたという防風林に先日行く機会がありまして、十勝管内なのですが、全くそういったことは知らなかったのですが、いざ行って、これ植えたんだよというふうに祖母から聞きまして、何かそれで大きく育っている防風林を見た時に、ぐっと胸に迫るものがあったというか、そういった経験をしまして、この計画自体が何十年単位でというようなお話がありましたので、次の世代だったり、その孫の世代にまで、そういった思いをつなげるようなものであってほしいなというふうに思っております。

以上です。

○中嶋氏 ありがとうございます。

それでは、近江さんお願いいたします。

○近江氏 このプラットフォームの北海道全体での展開と書かれている中に、これは完全に希望ですけれども、先程お話しした、本当に生きる力を育む学びがある、そういうことが何かプラットフォームとして、この中にあれば嬉しいなというふうに思いました。

後は、いずれにしても、この計画もそうですし、枠組み、仕組み、プラットフォームもそうですけれども、制度というのは作ることができると思うのですけれども、そこに関わる人の意識というものは決して押しつけることはできませんので、ここに関わる人達の主体的な意識づくりみたいところを、もちろん意識づくりという言葉を表に出すと、何かそこはまた変に誤解されてしまう恐れもありますので、うまくマネジメントしていくということを前提にしながら、何か意識づくりにつながるようなものを同時進行でやっていただければなんと、それがもしかしたらこのパートナーシップ会議というという部分での位置づけなのかなというふうに思った次第です。

以上です。

○中嶋氏 ありがとうございます。

それでは、せっかくでございますから、委員の神田先生からも一言お願いいたします。

○神田氏 今まで貴重な意見を皆様から聞かせていただきまして、改めて感じたことですが、この北海道総合開発計画というのは、北海道らしさというのをやっぱり崩さないというか、全面に押し出すべきものなのだなというふうに感じた次第であり、その線に沿ってこの計画が概要等を含めて書いてあるわけですが、4ページの人が輝く地域社会の形成、そして世界に目を向けた産業の振興、強靱で持続可能な国土の形成と、この三つはばらばらではなくて、全部つながっているなということを改めて感じたわけです。

というのは、この根底にあるのは、やはり皆様の意見を聞いて改めて感じたわけですが、北海道の自然の良さをより大切に守っていこうと、それを支えるのは人だということを改めて感じた次第であり、これを継続していく、また発展させていくということになると、具体的に北海道ならではの事業の取組、例えばこの循環型ビジネスといいますか、こういったことはまさに全て関わってくると。すなわち、北海道ならではのこの循環型ビジネスが色々なビジネスを更に大きく産んで、それに魅力を感じて、人が集まってくると。地元の人達もより魅力を感じるばかりではなくて、言い方は悪いのですが、本州の人達も、ああ、北海道ではこういう新しい事業、そしてこういうことを目指すべきだなというふうに魅力を感じるようにつながるのではないかなというふうに改めて思った次第です。

従って、今回のようなパートナーシップ会議、これで終わりではなくて、実行に移す段階で適時是非皆さんにも参加していただいて、また更なる貴重な意見を賜ればいいのではないかなというふうに改めて感じた次第です。

○中嶋氏 ありがとうございます。

最後に、私も一言だけ。例えば今、御議論の素材にいただいた4ページの資料は、

これは概要版なのでどうしても仕方がないのですが、書いてあることから北海道という言葉を除いてしまったときに、どの地域にも適応できるような計画になってしまっていないかということは気をつけなければいけないと思います。ただ、分厚い方の中間整理を読んでもいただければ、やはりこれは北海道のための北海道ならではの計画になっていると思います。なので、コミュニケーションしていく時に、そういう心が入ったものなんだということは我々も発信しなければいけませんし、皆さんと対話を重ねて、納得感のあるものにしていかなければいけないと思いました。

今日会議に出させていただいて、本当に取組は進んでいると思いますし、この中間整理で進めようとしていることは間違いではないと思いますが、やはりそれを更に実効あるものにしていくためには、かなりの課題があると思います。皆様と一緒に考え、進めていければというふうに感じた次第でございます。

4時半までということだったにもかかわらず、私の進行が悪くて少し時間を過ぎてしまいました。申し訳ありませんでした。

本日は、本当に貴重な御意見をいただきましてありがとうございます。

それでは、ここで私の司会は終了いたしまして、事務局にお返ししたいと思います。

6. 閉 会

○**小林開発計画課長** 中嶋委員、本会議の司会、どうもありがとうございました。

大変有意義な会合ができたと思います。

逆に時間を短くしてしまったのは事務局の都合で、お尻を切っているこちらの方が申し訳ありませんでした。本当にどうもありがとうございました。

それでは、最後に、岡部北海道局長から皆様方の御意見を踏まえたコメントをお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○**岡部北海道局長** コメントということではありません。お礼を申し上げたいと思います。

今日はお忙しい中、御参加いただきまして、それぞれ皆さんが御活躍されている中での経験だとか、体験を踏まえて、それぞれのお立場から貴重な御意見をいただきました。

総じて申し上げて、計画の中身というよりは、その後、いかに推進するかに関わるようなお話が多かったし、正にそれをそれぞれの地域で先行的に色々やられているというお話だったというふうに思っております。

先ほど神田先生のお話からも、今後のパートナーシップ活動についてのロードマップをもうちょっと厚みを持たせたり、現実的なイメージを持たせるようにというお話もいただきました。正に今日いただいたお話を参考にさせていただきながら、そういう形で現実味を持って、計画を作った後の推進に是非活かさせていただきたいというふうに思っておりますし、実際にそういうプラットフォームを作ったり、パートナーシップ会議を推進する段階で、また御参加いただいて、半歩先を行っている中からの御経験で、また色々貴重な

御助言をいただければと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

今日は、誠にありがとうございました。

○小林開発計画課長 どうもありがとうございました。

今日は、本当にお忙しい中、また天候の悪い中、長時間おつき合いいただきましてどうもありがとうございました。

どうも今の局長と、あと委員の皆様の御発言ですと、ではまた次回というような雰囲気がありますけれども、何らかの形でこのパートナーシップ会議、引き続いていくと思いますので、東京の北海道局のみならず、北海道開発局、それから帯広開発建設部も一緒になりながら、こういう活動を持続させていきたいと思いますので、その際にはまた縁がありましたら、おつき合いいただければと思います。

それでは、以上をもちまして、北海道価値創造パートナーシップ会議 i n 帯広～新たな北海道総合開発計画に向けて～を閉会いたします。

本日は、御多忙のところ御参集賜り誠にありがとうございました。